

# 藤山第2遺跡

Fujiyama 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター95集 藤山第2遺跡

附 録				
挿図目次				
第33図 科学分析サンプリング地点 ..... 30				
図版目次				
図版2 縄文時代早期石器③④				
1頁 右段 20行目 泉 拓良(奈良大学)				
30頁 第2表 造物観察表 (1) 土器				
造物 番号	種別	種類	出土 位置	
		部位		
35	縄文土器	浅鉢 口縁部	A区 II層	
36	縄文土器	浅鉢 口縁部	A区 IV層	
37	縄文土器	不明 底部附近	A区 IV層	

造物 番号	種別	種類	出土 位置	
		部位		
35	縄文土器	浅鉢 口縁部	A区 II層	
36	縄文土器	浅鉢 口縁部	A区 IV層	
37	縄文土器	不明 底部附近	A区 IV層	

# 藤山第2遺跡

Fujiyama 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

本書に掲載した児湯郡新富町大字新田字石田所在の藤山第2遺跡は平成12年度に発掘調査を行ったものです。調査によって、主に縄文時代早期の時期にあたる遺構や遺物を確認することができました。

これらの遺構、遺跡は、今後、当地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となるものと考えられます。ここに報告する内容が学術資料となるだけでなく学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後に、調査に際しまして御協力いただいた関係諸機関、調査指導の先生方をはじめ、発掘作業・整理作業に従事してくださいました皆様に心より感謝申し上げますとともに、調査に御協力・御理解いただいた地元の方々に対して厚く御礼申し上げます。

平成16年12月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 宮園淳一

## 例　　言

- 1 本書は、平成12年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した。
- 3 現地での実測等の記録は、戌亥浩志、尾園賢二、下西武志、和田理啓、高木祐志が行ったほか発掘作業員が補助した。
- 4 本書使用の遺物実測図は、戌亥、藤木聰、秋成雅博（現清武町教育委員会）が作成したほか整理作業員が補助した。
- 5 本書に使用した実測図等の著者は、戌亥が行ったほか整理作業員が補助した。
- 6 現地での写真撮影は戌亥、尾園、高木が行い、出土遺物写真は今塩屋毅行が撮影し、戌亥が補助した。
- 7 測量・空中写真・理化学的分析等は次の機関に委託した。

地形測量・グリッド杭設定：	有限会社 服部測量設計
空中写真：	九州航空株式会社
テフラ分析・植物珪酸体分析・花粉分析：	株式会社 古環境研究所
- 8 本書に使用した略記号は次のとおりである。

S C	・	・	土坑	S I	・	・	集石遺構
-----	---	---	----	-----	---	---	------
- 9 本書で使用した位置図及び周辺道路分布図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所より提供の1000分の1図をもとに作成した。
- 10 本書で用いた標高は海拔絶対高であり、方位は座標北（G, N）を基本とし、一部に磁北（M, N）を使用した。本地域における真北との偏差は約6°である。
- 11 本書で使用した国土地標は、旧平面直角座標系Ⅱ（日本測地系）による。
- 12 土器の色調及び土層については農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 13 出土遺跡の石材については県総合博物館の松田清孝氏に同定をお願いした。
- 14 本書の執筆・編集は藤木、今塩屋、金丸琴路の協力を得て、戌亥が担当した。
- 15 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　例

1 挿図の縮尺は次のとおりとする。

遺構分布図・・・1/400

縄文土器・・・1/3

石器・・・2/3・1/2・1/3・1/4

遺構実測図・・・1/20・1/30

弥生土器、須恵器、陶磁器・・・1/4

土層断面図・・・1/60

以上を基本とし、以外のものも含めて挿図の中にその縮尺を明示した。

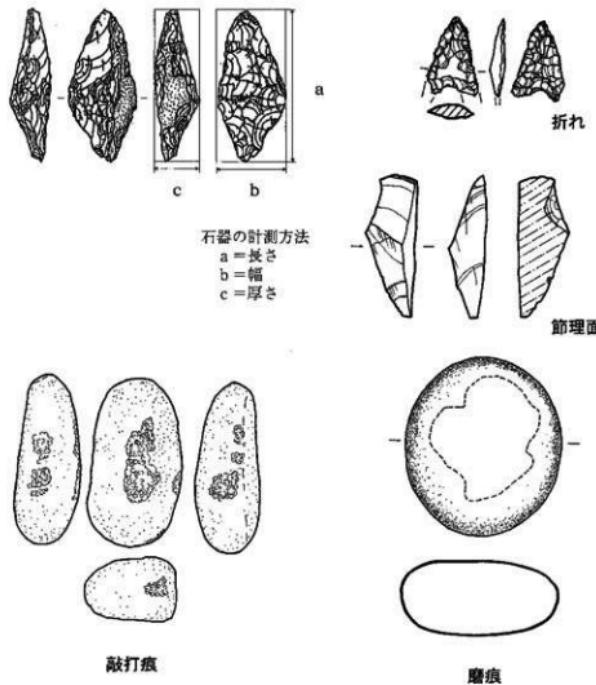
2 土器観察表及び石器計測表の計測値は、下記の計測方法に據った。単位はcm、gである。

3 石器実測図の中の記号・表示は以下のものを示す。

・石器の節理面は一点鎖線で表示する。

・「折れ」の状態が確認された土器には、欠損部分に「」の記号を記す。

・敲打痕、磨痕は下記の要領で記す。



# 目 次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯 ..... 1

第2節 調査の組織 ..... 1

第Ⅱ章 遺跡の環境 ..... 2

## 第Ⅲ章 調査の経過と方針

第1節 確認調査の概要 ..... 4

第2節 発掘調査の方法・概要 ..... 6

第3節 整理作業及び報告書作成 ..... 7

## 第Ⅳ章 調査の記録

第1節 基本層序 ..... 8

第2節 繩文時代早期の遺構と遺物 ..... 10

(1) 遺構 ..... 11

(2) 遺物 ..... 13

## 第3節 アカホヤ降灰以降の遺物

(1) 繩文時代前期の遺物 ..... 18

(2) 繩文時代後期の遺物 ..... 18

(3) 繩文時代後期以降の遺物 ..... 18

## 第V章 自然科学分析

第1節 目的 ..... 32

第2節 テフラ分析 ..... 32

第3節 植物珪酸体分析 ..... 34

第4節 花粉分析 ..... 36

第VI章 まとめ ..... 37

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 ..... 3

第13図 繩文時代早期土器実測図 ..... 13

第2図 調査区域図 ..... 4

第14図 繩文時代早期石器接合資料 ..... 14

第3図 確認調査トレンド配置図 ..... 5

第15図 繩文時代早期石器実測図(1) ..... 14

第4図 グリッド配置図 ..... 6

第16図 繩文時代早期石器実測図(2) ..... 15

第5図 基本土層模式図 ..... 8

第17図 繩文時代早期石器実測図(3) ..... 16

第6図 セクションポイント配置図 ..... 8

第18図 繩文時代早期石器実測図(4) ..... 17

第7図 土層断面図 ..... 9

第19図 アカホヤ降灰以降遺物分布図 ..... 19

第8図 繩文時代早期の遺構・遺物分布図 ..... 10

第20図 繩文時代前期土器実測図 ..... 20

第9図 SI 1 実測図 ..... 11

第21図 繩文時代後期土器実測図(1) ..... 20

第10図 SI 2 実測図 ..... 11

第22図 繩文時代後期土器実測図(2) ..... 21

第11図 SI 3 実測図 ..... 12

第23図 アカホヤ降灰以降石器実測図(1) ..... 21

第12図 SC 1 実測図 ..... 12

第24図 アカホヤ降灰以降石器実測図(2) ..... 22

第25図	アカホヤ降灰以降石器実測図(3)	23	第32図	縄文時代後期以降の遺物実測図	29
第26図	アカホヤ降灰以降石器実測図(4)	24	第33図	科学分析サンプリング地点	30
第27図	アカホヤ降灰以降石器実測図(5)	25	第34図	サンプル土層柱状図	33
第28図	アカホヤ降灰以降石器実測図(6)	26	第35図	A区第1地点テフラ組成ダイヤグラム	33
第29図	アカホヤ降灰以降石器実測図(7)	27	第36図	A区第1地点植物珪酸体分析結果	35
第30図	アカホヤ降灰以降石器実測図(8)	28	第37図	A区第1地点植物珪酸体分析結果	35
第31図	アカホヤ降灰以降石器実測図(9)	29			

## 表 目 次

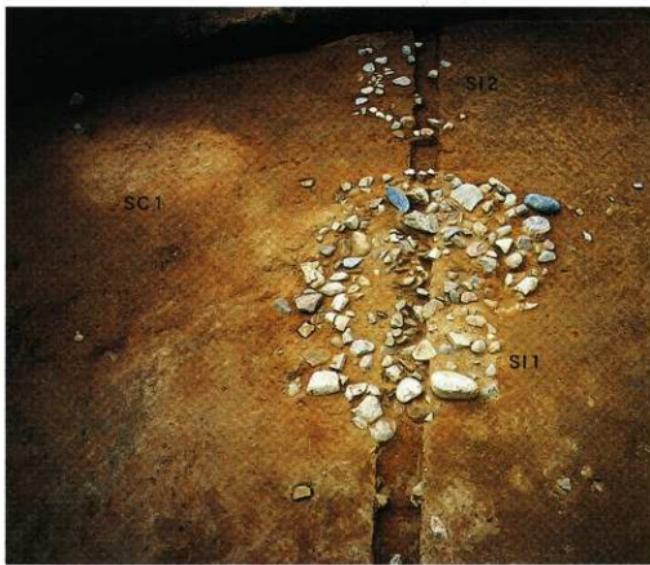
第1表	縄文時代早期集石遺構一覧表	10	第6表	B区テフラ検出分析結果	33
第2表	遺物観察表	30	第7表	A区屈折率測定結果	33
第3表	石器計測表	31	第8表	植物珪酸体分析結果	35
第4表	A区第1地点火山ガラス比分析結果	33	第9表	花粉分析結果	36
第5表	A区第1地点重鉱物組成分析結果	33			

## 図 版 目 次

卷頭図版 1	遺跡遠景		図版 2	縄文時代早期土器	40
卷頭図版 2	縄文時代早期遺構検出状況			縄文時代早期石器①	
	SI 4 配石検出状況			縄文時代早期石器接合資料①	
図版 1	A区調査前	39		縄文時代早期石器接合資料②	
	A区段丘礫、「散礫」検出状況			縄文時代早期石器③④	
	SI 1 検出状況		図版 3	縄文時代前期、縄文時代後期土器①	41
	SI 3 検出状況			縄文時代後期土器②	
	SI 4 検出状況			アカホヤ降灰以降石器①②③④	
	SI 4 配石		図版 4	アカホヤ降灰以降石器⑤⑥	42
	SI 5 検出状況			台石	
	SC 1 完掘状況			縄文時代後期以降の遺物①②	



遺跡遠景（東より一つ瀬川を臨む）



繩文時代早期遺構検出状況 (SI 1・SI 2・SC 1)



SI 4 配石検出状況

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（北九州～加治木間、約436km）の都農～西都間は平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月に整備計画区間となり、平成9年12月に建設大臣の施行命令が日本道路公団に発令された。その後、宮崎県教育委員会は路線内の分布調査を行い、総延長24.7kmの区間に79遺跡896,000m<sup>2</sup>の遺跡対象地を設定した。

藤山第2遺跡を含む周辺地域の分布調査で縄文時代早期の土器、石器を表探したことから、遺跡が立地する可能性があり確認調査を実施することになった。確認調査は、平成12年7月24日から平成12年8月4日にかけて行われ、縄文時代早期と考えられる集石遺構が検出された。調査区域は谷地形で、谷底には遺構、遺物は確認されなかった。

この結果を受けて、日本道路公団と宮崎県教育委員会との間で協議が行われ、本調査を実施することになった。遺構、遺物が確認できなかった谷底部分は調査区から除外し、谷の両脇部分を本調査の対象区として設定した。発掘調査は、宮崎県埋蔵文化財センターが平成12年9月4日から平成13年1月9日にわたって行った。

## 第2節 調査の組織

藤山第2遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

埋蔵文化財センター

所長

矢野 剛（平成12年度～平成13年度）

米良 弘康（平成14年度～平成15年度）

宮岡 淳一（平成16年度）

副所長兼総務課長

菊地 茂仁（平成12年度～平成13年度）

大蔵 和博（平成14年度～平成16年度）

総務係長

亀井 雅子（平成12年度～平成13年度）

野邊 文博（平成14年度）

主幹兼総務係長

石川 恵史（平成15年度～平成16年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成12年度～平成16年度）

調査第一課長

面高 哲郎（平成12年度～平成13年度）

児玉 章則（平成14年度～平成15年度）

高山 富雄（平成16年度）

調査第一係長

谷口 武範（平成13年度～平成16年度）

主幹兼調査第二係長

長津 宗重（平成12年度～平成16年度）

調査担当

主査 戊亥 浩志（平成12年度～平成16年度）

主査 尾園 賢二（平成12年度）

主事 下西 武志（平成12年度）

調査員 高木 敦志（平成12年度）

調査指導

小畑 弘己（熊本大学）

泉 拓良（奈良大学）

本田 道輝（鹿児島大学）

田崎 博之（愛媛大学）

柳沢 一男（宮崎大学）

広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館）

加藤 真二（文化庁）

長岡 信治（長崎大学）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

宮崎県のはば中央部には、東に日向灘を臨む宮崎平野がひろがる。その平野部の北寄りに新富町は位置し、北部・西部に台地・丘陵が、南部に一つ瀬川の低地がみられる。町の中央部から西部にかけて一つ瀬川と小丸川に挟まれた洪積台地がひろがり、その段丘面は標高の高いほうから茶臼原面、三財原面、新田原面等と呼称されている。町の南部一帯に海拔約70~80mの新田原台地がひろがり、日置川、鬼付女川、藤山川水系の浸食により幾筋もの谷が形成されている。その台地の西部には、新田原古墳群の支群のひとつである祇園原古墳群が展開している。

藤山第2遺跡は新富町大字新田字石田に所在し、祇園原古墳群が展開する台地南端部の舌状丘陵の中腹標高30m~40mに立地する。遺跡の北側は標高が高くなり新田原台地がひろがる平坦面に連なり、遺跡の南側には藤山川が西進し、一つ瀬川に流入している。現況は沢による浸食を受けた谷状地形であり、谷の両脇は土取による削平で切り立っており断面M字型を呈する。旧地権者の話や旧版の地形図から推定すると、調査区周辺の土地の大部分が削平により消失し、調査区のみが残ったと考えられる。調査区東側に里道があり、藤山川沿いの低地と新田原台地とをつなげる機能を果たしていたものと考えられる。また、本遺跡より300m東には藤山川を堰き止めて造られた藤山溜池がある。

今回の調査では、縄文時代早期の遺構・遺物を中心に、縄文時代後期や弥生時代、古代、中世、近世の遺物が出土している。そこで、本遺跡周辺の状況について、出土遺物の該期の遺跡を中心に分布状況を概観したい。縄文時代では、本遺跡の北約1kmの祇園原台地西部に位置する瀬戸口遺跡<sup>(1)</sup>が挙げられる。瀬戸口遺跡は集石遺構が23基検出されるなど、新富町の縄文時代草創期、早期を代表する遺跡である。また、本遺跡と隣接している藤山第1遺跡<sup>(2)</sup>でも縄文時代早期の集石遺構を検出している。藤山川をはさんで対岸約1kmの台地上には昭和48年から開始された県営農村基盤総合整備パイロット事業により昭和63年から調査された七又木地区遺跡<sup>(3)</sup>

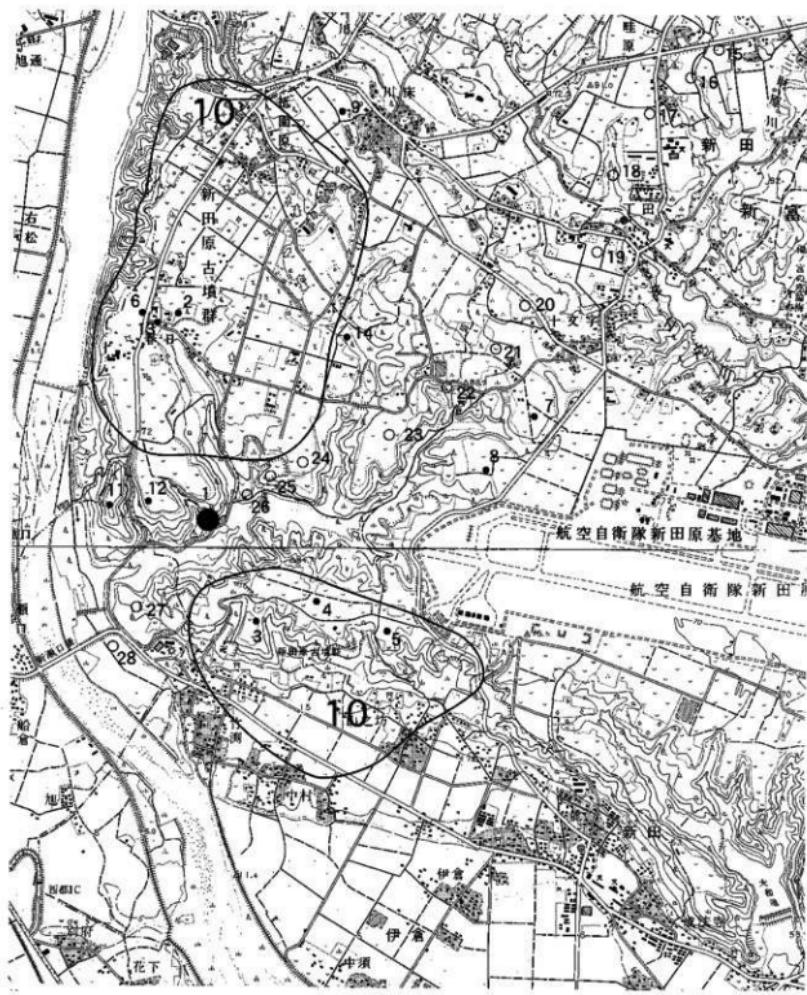
がある。その中の銀代ヶ追遺跡は縄文時代早期、弥生時代、古墳時代の遺構を、八幡上遺跡は弥生時代の堅穴住居跡を検出し、七又木遺跡は縄文時代早期の集石遺構や古墳時代の古墳周溝、周溝墓などを検出している。この七又木地区遺跡の西側の尾根上に宮ノ東遺跡<sup>(4)</sup>が立地する。ここでは弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。また、弥生時代では他に、本遺跡の東1.5kmに位置する新田原遺跡<sup>(5)</sup>や、本遺跡の北2kmに位置する川木遺跡が立地し、古墳時代を代表する新田原古墳群が新田原台地西部全域にひろがる。このように本遺跡周辺では、台地縁辺部から台地上までの広い範囲に縄文時代早期から古墳時代にかけて遺跡が展開する。中世の遺跡としては、本遺跡の西1kmに山城跡の有峯城跡や東城遺跡がある。近世の遺跡では、瀬戸口遺跡に隣接して牧場跡の春日神社横牧土手遺跡や本遺跡の北東1.5kmに茶碗山窯跡遺跡がある。文献では藤山川上流の字尾小原にある妙見神社が「藤山妙見社」と記されていた江戸時代の記録が残っている。また、太平洋戦争時に造られたとされる防空壕が本遺跡にあり、投下された爆弾の一部らしき金属片が調査区地中より見つかるなど、戦時下の様子を残している一面も見られる。

註1 宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書第4集「新田原遺跡 瀬戸口遺跡 岐園地下式横穴墓」 1986 新富町教育委員会

2 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ」 2003 宮崎県埋蔵文化財センター

3 新富町文化財報告書第13集「県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴二期地区七又木工区)に伴う文化財発掘調査報告書 七又木地区遺跡 八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ追遺跡」 1992 新富町教育委員会

4 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ」 2004 宮崎県埋蔵文化財センター



第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (S = 1 / 25000)

- |              |            |             |            |            |
|--------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1 藤山第2遺跡     | 2 濱戸口遺跡    | 3 銀代ヶ迫遺跡    | 4 八幡上遺跡    | 5 七又木遺跡    |
| 6 春日地区遺跡第2地点 | 7 新田原A遺跡   | 8 新田原B遺跡    | 9 川床遺跡     | 10 新田原古墳群  |
| 11 有峯城遺跡     | 12 東城遺跡    | 13 春日神社横牧遺跡 | 14 茶碗山窓跡遺跡 | 15 東畦原第3遺跡 |
| 16 西畦原第1遺跡   | 17 西畦原第2遺跡 | 18 上新開遺跡    | 19 一丁田遺跡   | 20 勘大寺遺跡   |
| 21 永平田第1遺跡   | 22 永平田第2遺跡 | 23 尾小原遺跡    | 24 向原第1遺跡  | 25 向原第2遺跡  |
| 26 藤山第1遺跡    | 27 宮ノ東遺跡   | 28 宮ノ前遺跡    |            |            |

(1及び15~28の各遺跡は東九州自動車道建設に伴う遺跡)

## 第Ⅲ章 調査の経過と方針

### 第1節 確認調査の概要

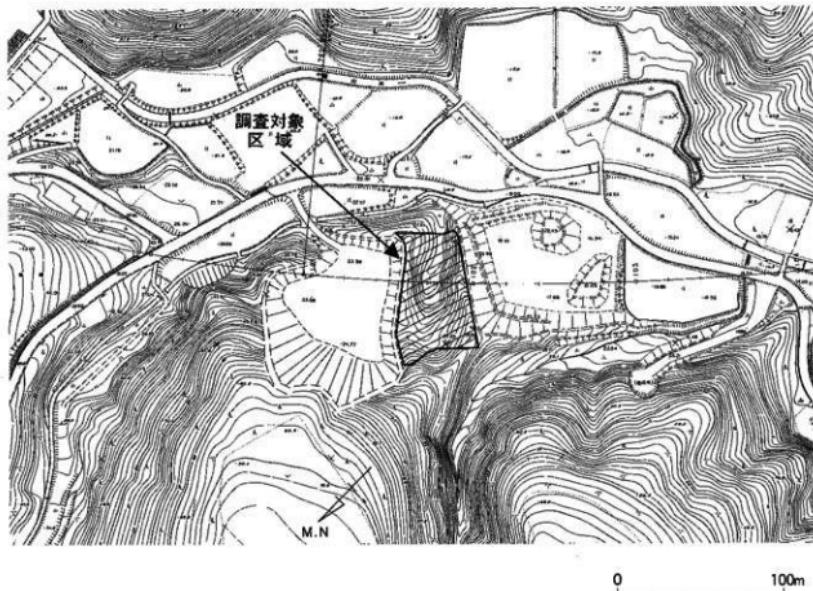
まず調査対象区の踏査を行い、調査区西端部で縄文時代早期の上器片や黒曜石製の剥片を表採した。そこで、調査対象区が各地であることから、調査区中央部の谷底の平坦面にトレント1~4を設定し、谷の斜面にトレント5~15を設定した。各トレントは2m×2mを基本とし、手掘りで掘り下げた。

その結果、トレント1~4・5・7では遺構・遺物は確認されず、表土から1m以内の比較的浅い位置で宮崎層群を形成する砂岩および泥岩の層を確認した。トレント7では床面より湧水が見られ、雨が降った翌日の調査区では地表面を流れる水を確認したことから、沢筋であるこれらのトレント周辺は常に流れ込みがあり、一定の層序を得るには至らなかつた。トレント3では表土直下約1mに及ぶ宮崎層群の堆積が確認されたが、これはトレント3の近くに

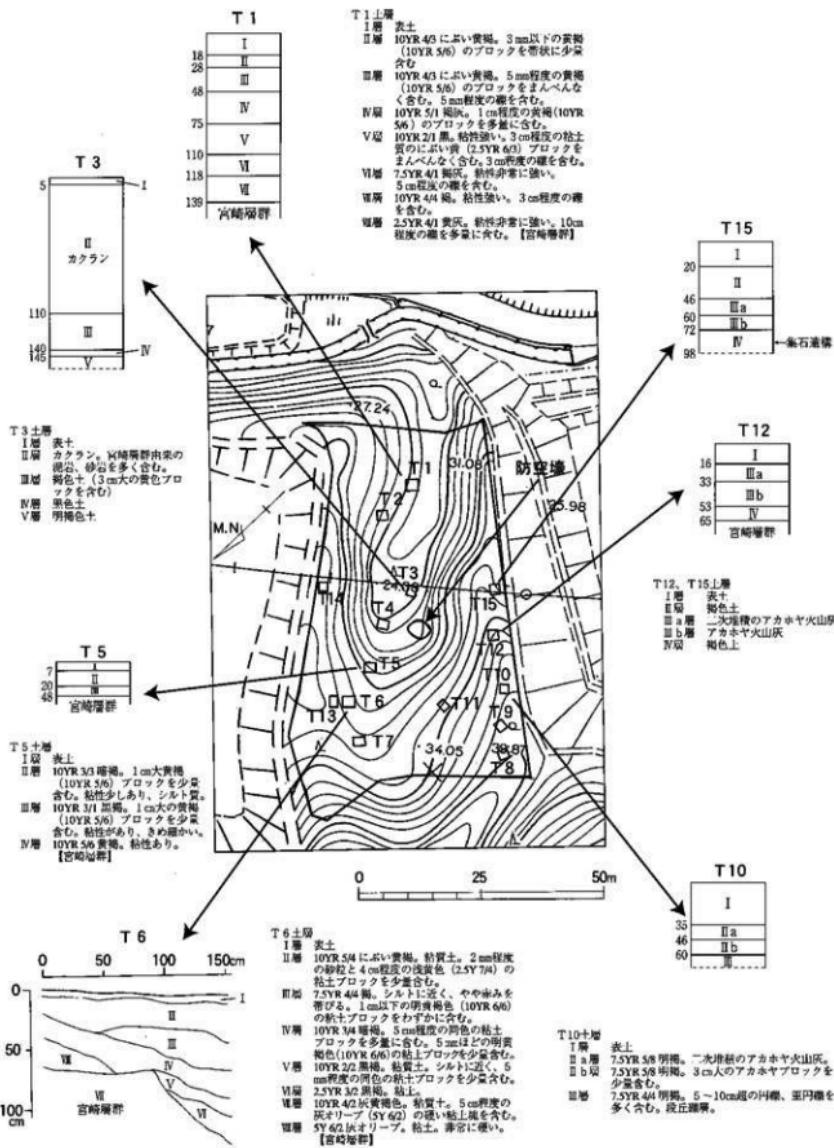
ある防空壕を掘削した際の堆土であると考えられる。

トレント6・13では、黒色土が厚く堆積したその下に長さ50cmをこえる礫のまとまりを検出し、溝状遺構と考えられた。トレント10・15では、アカホヤ火山灰の下層で集石遺構の一部と考えられる礫の集まりを検出した。礫となる火山灰層としては、調査区西側でアカホヤ火山灰および小林軽石を含む層を確認した。

これらの経緯と確認調査の結果から谷底部の本調査は必要ないと判断した。また、集石遺構を検出した調査区西側境界付近を中心に、溝状遺構を検出した調査区東側斜面の一部を加えて、1,000m<sup>2</sup>を本調査対象とした。



第2図 調査区域図 (S = 1/3000)



第3図 確認調査トレンチ配置図（1/1000）

## 第2節 発掘調査の方法・概要

### (1) 調査の方針

本調査は、調査区が谷を挟んだ傾斜地で機械が入りにくい状況にあることから人力での調査を中心に行うこととした。

集石遺構を検出し、土器片や石器を表探しした西側斜面の調査に重点を置き、東側斜面の巨礫を検出した周囲や里道に沿った標高の高い部分を平行して調査を進めていくことにした。

### (2) 調査区の設定

西側斜面をA区とし、東側斜面のうち滑状遺構のみられた部分をB区、さらにB区から里道に沿った斜面の上端部をC区と設定した。A区の西側境界部から谷底に向かって傾斜しており、その西側境界部が路線幅を示す幅杭を結んだ直線で区切られていることから、グリッド設定は国土座標によらず、地形に沿った任意のグリッド設定を行った。その西端の直線を基準のグリッドラインとし、北西部の幅杭をA0と設定した。調査区の幅が狭いのでグリッド杭は5m間隔とした(第4図)。

### (3) 調査の手順

本調査区は山麓地の傾斜地ということで、調査はまず人力で表土を剥ぎ、残っている樹木の株を抜根することから始めた。A区では鏡面のアカホヤ火山灰までを第1段階とし、さらにその下層の集石遺構のある層までを第2段階として調査を進めた。B区、C区は表土を剥ぎ、さらに調査が必要かはトレーニチを設定して確認することにした。

### (4) 調査概要

A区では表土を除去すると標高の高い北西部の一部にⅡ層黒褐色土がみられるのみで、この層からあまり遺物が確認できず一括で取り上げた。Ⅲ層からは縄文時代後期の土器片等がいくつかまとまって出土した。アカホヤ火山灰の二次堆積であるⅣa層では同様に土器の底部や石匙、石鎌等が出土した。このⅣa層面で地形測量を実施した。確認トレーニチ10で検出した集石遺構とした礫の広がりについては全面掘り下げをした結果、10~30cm程度の円礫や亜円礫が調査区の傾斜に沿って一様に堆積し、下層に宮崎層群を検出している状況から、段丘上の礫層の一部であるとし、その部分の調査を調査対象から除いた。



第4図 グリッド配置図 (1/1000)

た。また、表土下からは洪武通宝が出土し、Ⅱ層とⅣ層間で接合する土器片があるなど、急斜面であることを考えると、不安定な堆積状況であるといえる。

アカホヤ火山灰を除去したあと、A 0グリッドからA 2グリッドにかけてV層で礫の広がりを検出した。この礫の広がりは、先述の段丘礫と性格が違い、10cm程度の角礫が広がり、その礫の下層のVI層で集石遺構を2基(SI4, SI5)検出したことから、集石遺構と関連のある「散疊」と考える。さらに同じVI層では、集石遺構を3基(SI1, SI2, SI3)、土坑を1基検出した。

調査期間が迫っており縄文時代早期以前の遺構・遺物についてはトレンチ調査とし、計8本のトレンチを設定したが、明確な遺構・遺物は確認できなかつた。

B区は表土剥ぎの後、4ヵ所にトレンチを入れ、断面や埋土の堆積状況を確認したが、溝状遺構か沢かの判断ができず、埋土を自然科学分析にかけた結果、自然埋没による谷(沢)の可能性が高いという結果が導かれた(第V章参照)。

C区は表土剥ぎの際にはほぼ完形の近世の土瓶が出土した。C区はA区、B区と比べるとさらに急傾斜であることから、トレンチを斜面上端に3本設定し、遺構・遺物の確認に努めたが成果がなく、遺物堆積状況も良好でなかったことから調査対象から除いた。

戦時中のものとおもわれるものとして、確認トレンチ4の近くで間口2m、高さ1.7m、奥行き5mの防空壕を発見し、A区の2ヵ所、C区の1ヵ所で爆弾の一部とおもわれる金属片を確認した。

#### (5) 調査終了後の状況

調査終了後は斜面に落とした堆土が谷筋に沿って流出しないよう、谷間にバックホーで堰堤をつくり土留めとした。

#### (6) 日誌抄

平成12年

##### 9. 4 調査開始

9. 18 土器片が出土するようになる。

9. 27 トレンチ10を精査した結果、集石遺構ではなく、礫層であることを確認。

9. 29 トレンチ15で確認した集石遺構(SI1)の西側にさらに1基(SI2)検出。

10. 5 A10グリッドで集石遺構(SI3)を検出。

10. 16 A0グリッドで集石遺構1基(SI4)検出。A9グリッドで土坑1基検出。

11. 9 A0グリッドでさらに集石遺構1基(SI5)検出。

11. 15 A0グリッド周辺の集石遺構は上層の「散疊」と関連があることを確認。

12. 21 A0グリッドの集石遺構1基(SI4)に配石を確認。

平成13年

##### 1. 9 調査終了

### 第3節 整理作業及び報告書作成

出土した遺物を層別に分けてみると、アカホヤ火山灰で大きく2つに分けられる。表土からIVa層にかけて異なった時代の遺物が混ざった状態で出土し、層による時期設定が難しいため、アカホヤ火山灰上層は一括して章立てて扱うこととした。その中でⅢ層、IVa層は縄文時代後期の遺物を中心に縄文時代前期の遺物も含めた包含層として報告する。また、アカホヤ火山灰下層のV層、VI層の遺物は縄文時代早期として報告する。

整理作業は当センターの整理作業員の協力を得て平成13年2月から平成13年3月までの期間に水洗、注記、接合及び実測の一部を行い、残りの実測と拓本等を平成14年2月に行なった。その後、遺構分布図や遺構実測図など捕図を作成・トレースするかたわら本文執筆を進めていった。

## 第IV章 調査の記録

### 第1節 基本層序

本遺跡の基本層序を下に示した。層序を決定する上で鍵層となる鬼界アカホヤは良好に残存している。本報告に關係する火山灰は、このアカホヤ火山灰だけである。遺構・遺物に關係しない下層の火山灰として霧島小林軽石、始良Tn火山灰等が堆積しているのをトレンドで確認している。

I層は表土である。調査前は杉林であったことから、森林の下草部分にあたると考えられる。

II層黒褐色土はⅢ章で述べたとおりA区北西部の平坦部のみで堆積し、しまりがなくボロボロとしている。層厚は平均15cmである。

III層褐色土はA区のほぼ全域で確認され、縄文時代後期の遺物を主に含む包含層である。礫層が確認されたA3~4、B3~4グリッドでは薄く堆積し、しまりがなくボロボロしている。層厚は平均8cmである。

IV層はアカホヤ火山灰である。上層のIVa層明褐色土は二次堆積によるアカホヤ火山灰であり、ほぼ全域に分布している。Ⅲ層同様縄文時代後期の遺物を包含し、一部で縄文時代前期の遺物も包含している。しまりがなく、火山ガラスを含まない。層厚は平均8cmである。下層のIVb層橙色土はアカホヤ火山灰本体であり、IVa層同様の分布状況で、ややしまりがあり、火山ガラスに富む。層厚は平均7cmである。

I	表土
II	黒褐色土 (10YR 2/2)
III	褐色土 (10YR 4/4)
IV a	明褐色土 (7.5YR 5/8) (二次堆積のK-Ah)
IV b	橙色土 (7.5YR 6/8) (K-Ah)
V	褐色土 (10YR 4/6)
VI	暗褐色土 (10YR 3/4)
VII	褐色土 (7.5YR 4/6)
VIII	明褐色土 (7.5YR 5/6)
IX	黄褐色土 (10YR 5/8) (二次堆積のAT)
X	褐色土 (10YR 4/6)
XI	黒褐色土 (10YR 3/2)
XII	黒褐色土 (10YR 3/2)
XIII	明褐色土 (7.5YR 5/8) (Kr-Iw)
XIV	宮崎層群

第5図 基本十層模式図

V層褐色土はほぼ全域に分布し、縄文時代早期の包含層である。粒子が粗く、ボロボロしている。層厚は平均10cmである。

VI層暗褐色土はほぼ全域に分布し、V層同様縄文時代早期の包含層である。粒子が細かく、粘性が少ない。層厚は平均10cmである。

VII層褐色土は小林軽石を含む層であり、非常にしまりがある。ほぼ全域に分布しており、その中でも標高の高い北側が小林軽石をより密に含んでいる。

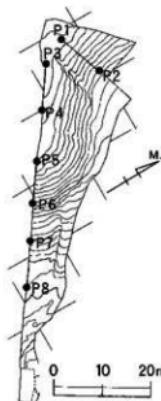
VIII層明褐色土は粒子が細かく、粘性が少し認められる。ほぼ全域に分布しており、部分的に5~10cm程度の礫を疎に含む。

IX層黄褐色土は始良Tn火山灰を含む層であり、粒子が細かくサラサラしている。火山灰本体でなく二次堆積層である。ほぼ全域に分布するが、傾斜の強い地点での堆積状況はよくない。

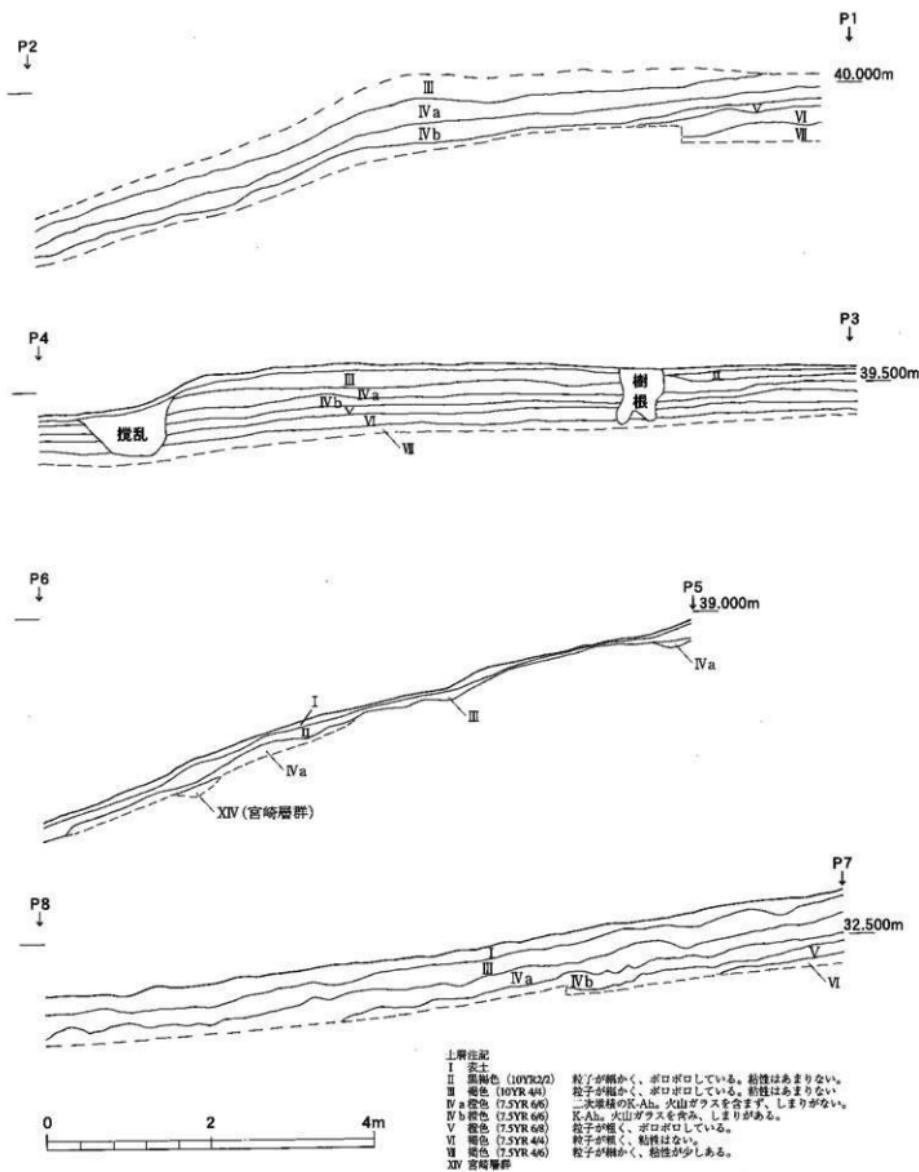
X層褐色土は上層IX層と下層XI層の漸移層であり、下層の硬質黒褐色土をわずかに含む。

XI層、XII層の黒褐色土は通称ブラックバンドとよばれる層で、非常に固くしまり、クラックが発達している。XI層は黒褐色土に白斑を含んでおらず、XII層は白斑を含んでいる。

XIII層はイワコシ、XIV層は宮崎層群である。



第6図 セクションポイント配置図  
(S = 1/1000)

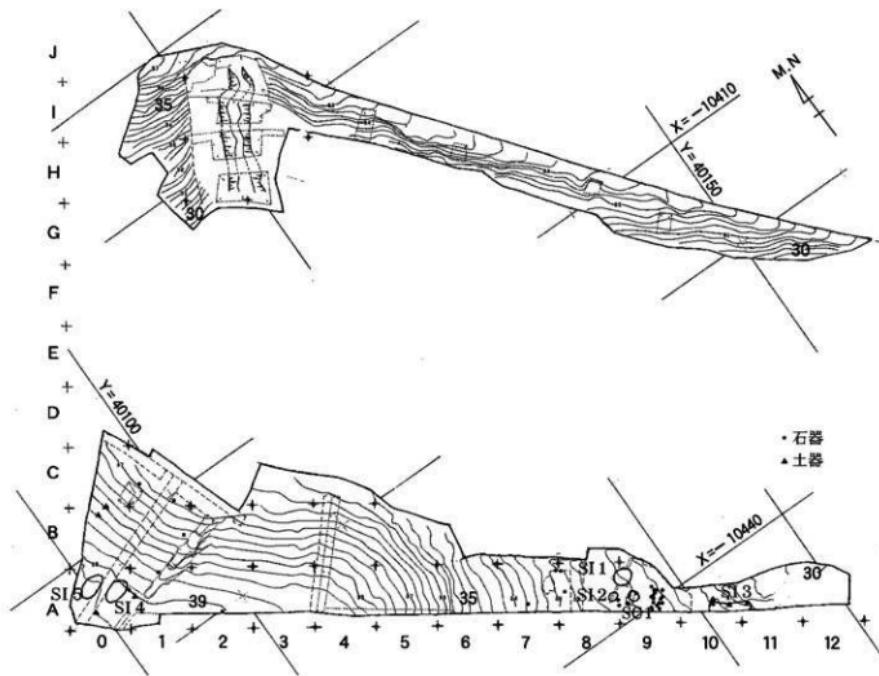


第7図 土層断面図 (S = 1/60)

## 第2節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構・遺物の分布状況は2つのエリアに大きく分けられ、それぞれA区南側のA 9グリッドを中心とするSI1、SI2、SI3、SC1周辺部とA区北側のA 0グリッドを中心とするSI4、SI5

周辺部である。A 9グリッド周辺では土器と剥片が混在して出土し、A 0グリッド周辺では土器が主体で石器は石鏃、敲石ぐらいで、全体的に斜面に沿ってまばらに出土している。



第8図 縄文時代早期の遺構・遺物分布図 ( $S = 1/400$ )

遺構番号	サイズ・縄の範囲(m)	掘り込みの深さ(m)	縄の密度	配石の有無	出土遺物	備考
SI 1	2.1×1.8	0.45	密	○	-	拳大の破砕縄、配石人頭 大川敲石1個
SI 2	1.3×1.0	-	疎	×	-	拳大以下の破砕縄
SI 3	4.5×1.1	-	疎	×	椎円押型文 羽 片	拳人の破砕縄(一部赤変)
SI 4	2.1×1.5	0.35	密	○	-	拳大の亜角縄、配石花弁状14個
SI 5	2.1×1.5	0.25	密	×	-	拳大以下の亜角縄

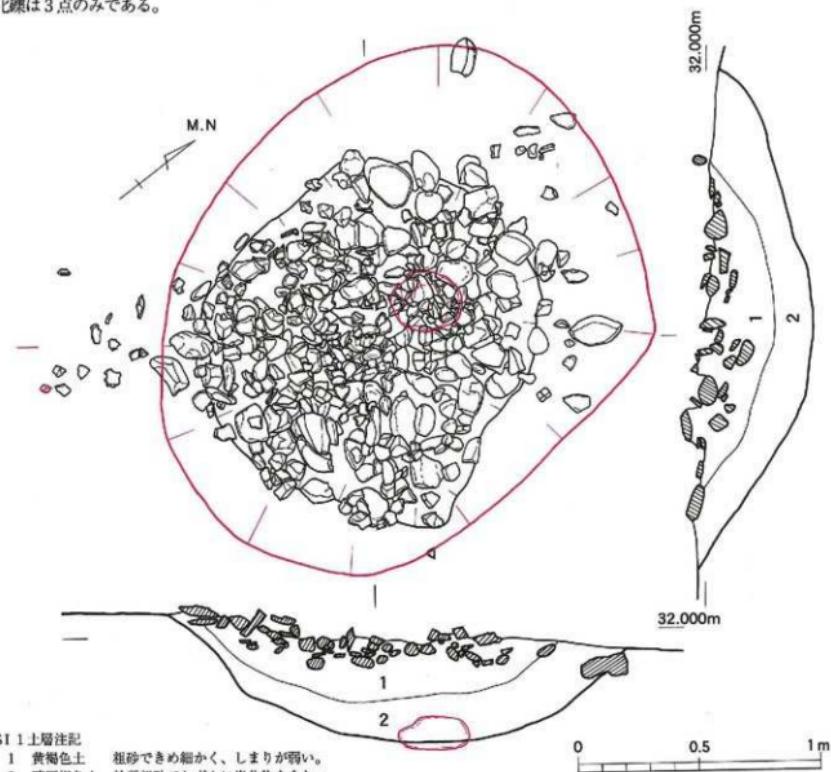
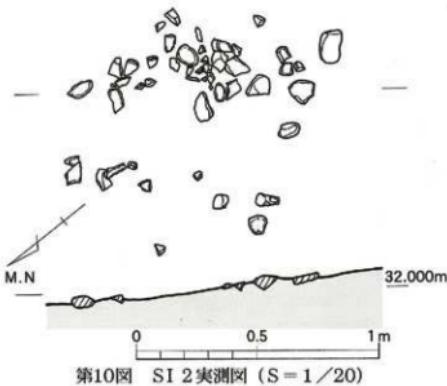
第1表 縄文時代早期集石遺構一覧表

(1) 遺構

①集石遺構

SI1(第9図)は、検出面はV層で確認調査時のトレンチ15で遺構の一部を確認した。礫の構成は拳大の破碎礫が主体を占めるが、20cmを超える亜角礫も遺構の縁辺部に多く見られ、赤化礫が数点認められる。掘込み下部に配石として30cm超の川原石が1個確認され、掘込み内の土の下部に炭化物がわずかに含まれる。

SI2(第10図)は、SI1より西に1m離れた箇所で検出した。礫の構成は拳大の破碎礫を主体に、それより小さい角礫が少量混じる。50点の礫のうち赤化礫は3点のみである。



第9図 SI1実測図 ( $S = 1/20$ )

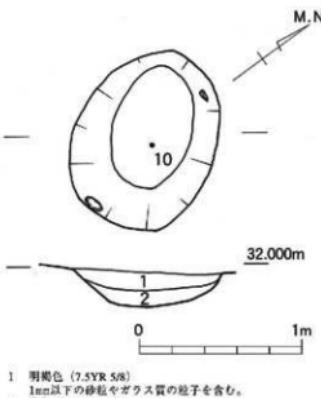
SI 3（第11図）は調査区境界付近で検出され、検出範囲が狭く、切り株も残っていたことから、その広がりを正確に把握することはできなかった。検出した範囲では長径4.5m、短径1.1mを測り、掘込みは確認できなかった。礫を検出した範囲は広いが、大きく3つのかたまりに分けることができ、北側より径1.6m、径0.6m、径2m程度の範囲にそれぞれおさまる。礫の構成は拳大以下の角礫を中心に10cmを超える角礫も混じる。ほとんどの礫が破碎礫であり、大きめの礫に特に赤化礫が含まれ、16点を数える。石器（第17図-22、第18図-25）、土器（第13図-3・4）をあわせて4点が出土した。

SI 4はV層で確認した「散礫」下部で検出され、掘込み下部には20~30cm程度の亜角礫の配石が花弁状に組まれている（図版3参照）。

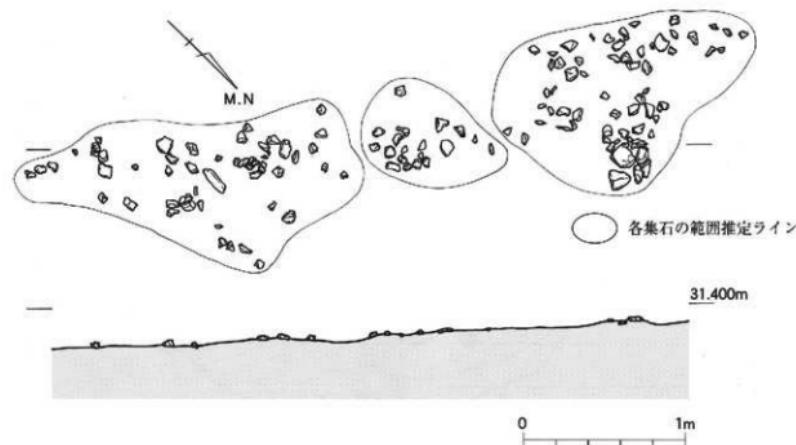
SI 5もV層で確認した「散礫」下部で検出され、配石を持たない集石遺構である。礫の構成は拳大以下の亜角礫を中心に遺構内に密集している。掘込み内の土には2mm程度の大きさの炭化物が混じる（図版3参照）。

## ②土坑

SC 1はSI 1・SI 2に隣接し同じV層面で検出された楕円形の平面プランをもつ土坑である。長径1.1m、短径0.8m、深さ0.2mの遺構内から礫が2点、床で黒曜石の剥片1点（第15図-10）が出土したが、遺構に伴うものは不明である。



第12図 SC1実測図 (S=1/30)



第11図 SI3実測図 (S=1/30)

## (2) 遺物

### ①土器 (第13図-1~4)

土器は楕円押型文を中心出土している。1・3・4は深鉢の脇部で、2が田村式の深鉢の口縁部である。1・2は調査区北側斜面出土の楕円押型文土器で、斜位の施文である。2は口縁部が外反し、粗大な楕円文を横位に施文し、内面には長大な斜行沈線文が二段にわたって施されている。外面の楕円文は摩滅気味である。3・4はSI 3から出土した土器片である。3は楕円押型文を横方向に施文している。4は剥落が激しく調整、施文は確認できない。

### ②石器 (第14~18図-5~27)

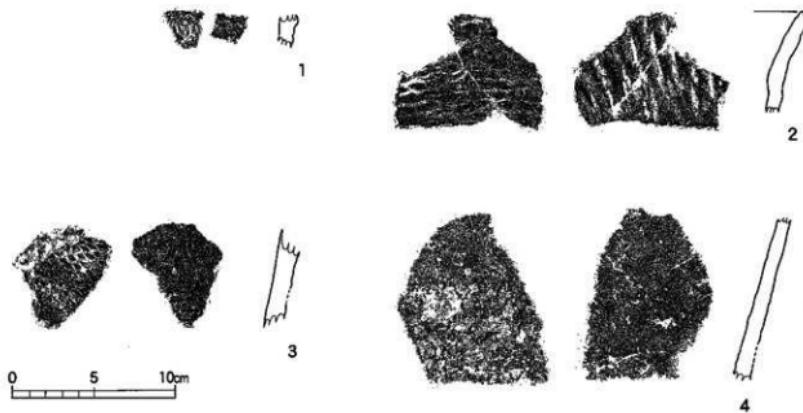
石器は石鏃が2点、敲石・磨石が1点、二次加工のある剥片が1点、接合資料1組が生なものである。8はチャート製の鋸形鏃である。近くでは2の土器片が出土している。9は黒曜石製の石鏃で脚部が折損している。11は一側縁に二次加工のある剥片である。

接合資料1は、石核7に剥片5と剥片6が接合するものである。石核はその形状から原石の約半分

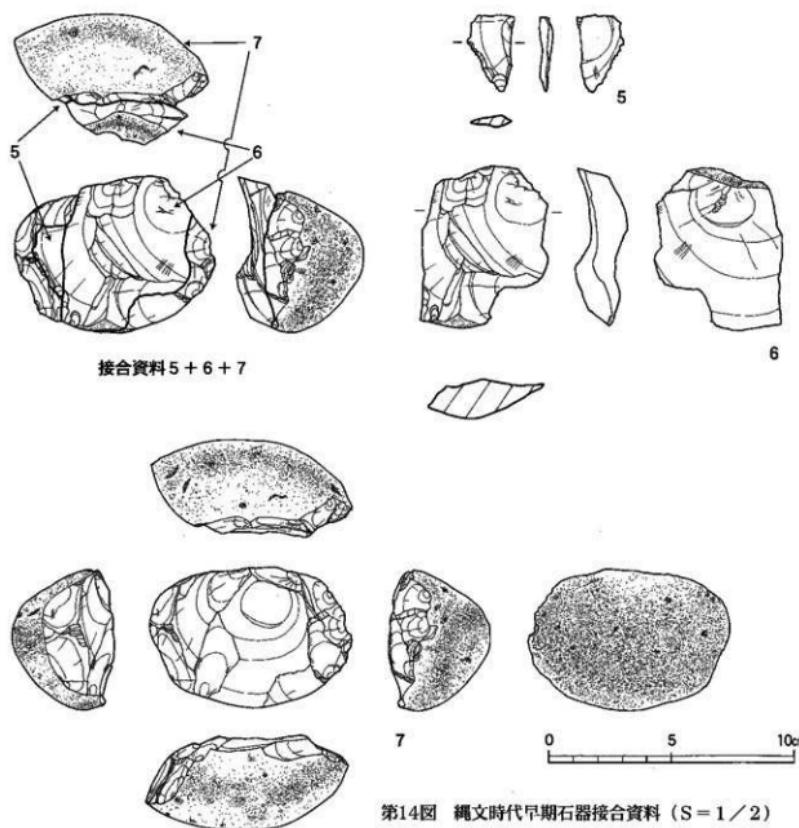
を占めるものとみられ、平坦面を作出するため斜め上方からの打撃により大きく分割されたち、礫面から内部に向かって剥離を繰り返された残核である。剥片5は礫面に沿っての剥離作業を開始直後の剥片であり、剥片6はその終了間際に得られたものである。以上のように平坦面を作出したのちに目的とする剥片を剥離する技術から考えると、接合資料1は後期旧石器時代の剥片剥離技術の可能性があるといえる。

10はSC 1の床付近より出土した黒曜石製の剥片である。17は使用石材や剥離の状況から接合資料1と同一個体もしくは同様の後期旧石器時代の資料の可能性のある剥片である。19は裏面の剥離の際に2回打撃が行われた様子が看取される。20は被熱による焼けハジケが見られる剥片である。22・25はSI 3から出土した剥片である。27は砂岩製の敲石・磨石で、脇部の4面にそれぞれ2~3箇所ずつ敲打痕が見られる。

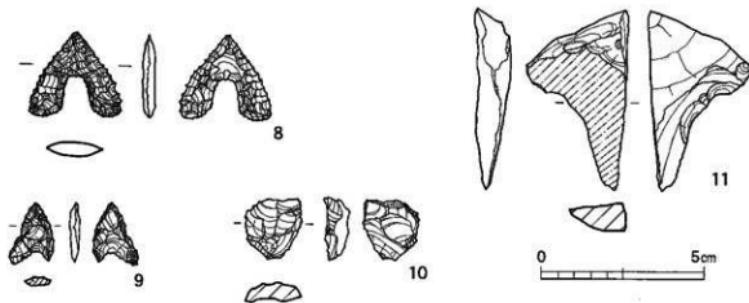
剥離による平坦面を打面に利用して剥離した剥片としては、17・19・21が挙げられる。



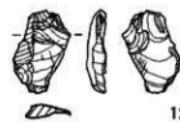
第13図 繩文時代早期土器実測図 (S = 1/3)



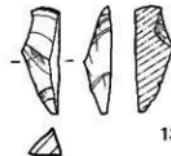
第14図 繩文時代早期石器接合資料 (S = 1 / 2)



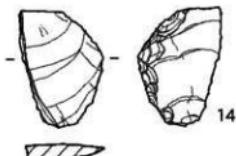
第15図 繩文時代早期石器実測図 (1) (S = 2 / 3)



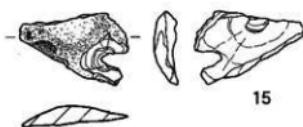
12



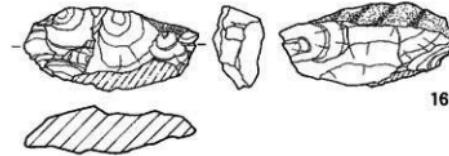
13



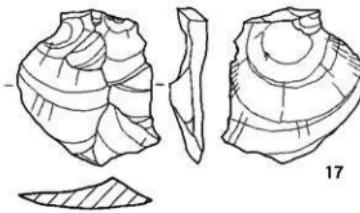
14



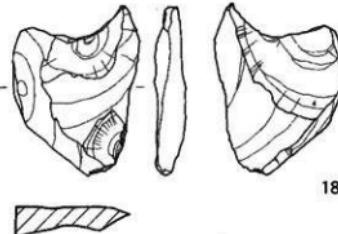
15



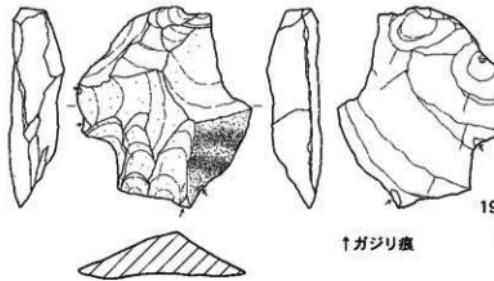
16



17



18

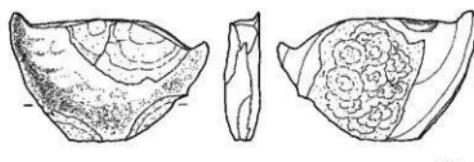


19

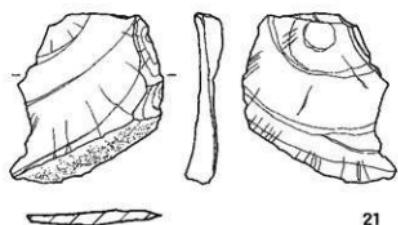
↑ガジリ痕

0 5 cm

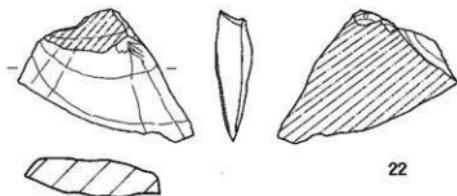
第16図 繩文時代早期石器実測図(2) (S = 2 / 3)



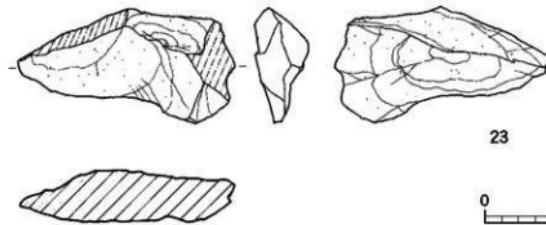
20



21



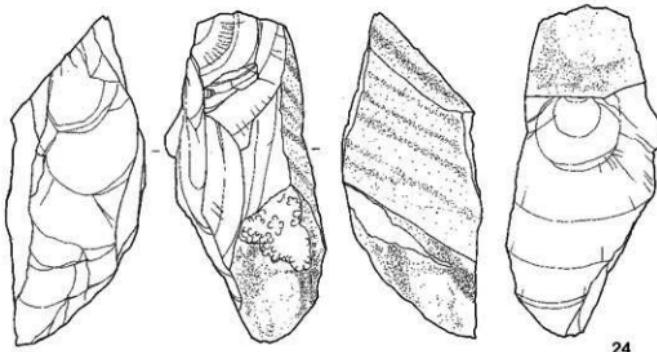
22



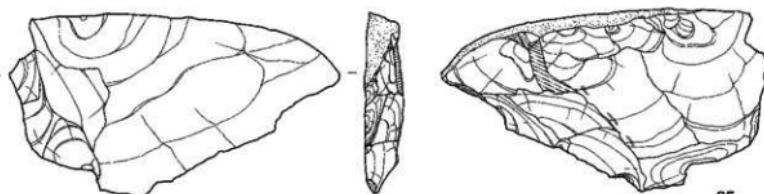
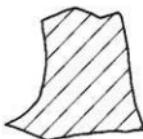
23

0 5 cm

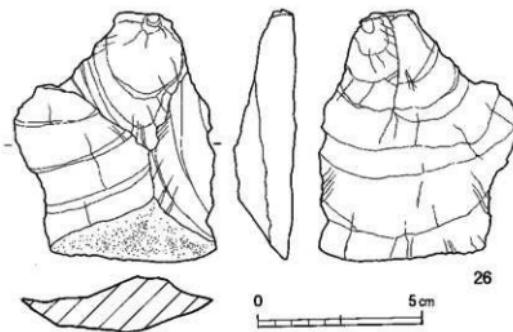
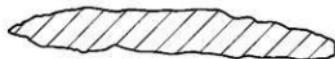
第17図 繩文時代早期石器実測図(3) (S = 2 / 3)



24

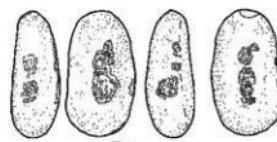


25



26

0 5 10cm



27

0 5 10cm

第18図 繩文時代早期石器実測図(4) 24~26 (S = 2/3)、27 (S = 1/4)

### 第3節 アカホヤ降灰以降の遺物

アカホヤ降灰以降の遺物はA区北側に集中して出土している。時期としては縄文時代前期、縄文時代後期、弥生時代前期、古代、中世、近世の遺物が確認されている。遺構は検出されていない。B3グリッドの直径1.5mの範囲で炭化物の集中がみられ、ススの付着した土器片が出土した(第21図-31)。

#### (1) 縄文時代前期の遺物(第20図-28・29)

遺物は土器のみで、28・29はつまみ出しによる微降起線文が見られる轟B式の頸部、胸部片である。28は横位の施文で、29は継位および斜位の施文がみられる。

#### (2) 縄文時代後期の遺物

##### ①土器(第21・22図-30~42)

30~33は深鉢の口縁部である。器形等から縄文時代後期と推定はできるが、時期や型式を決定するには至らなかった。30・32は2mほど離れた地点でそれぞれまとめて出土した。どちらも外反する口縁部と肩の張った頸部を持ち、外面にススが付着している。32の方が口縁端部に近づくほど外反の度合いは大きくなる。31も外反するが、口縁端部下2cmあたりでさらに外に開き、外面にススが付着している。33はII層出土遺物で、30~32と比べて外反が弱く、直立気味に口縁部が立ち、口縁部が肥厚気味である。

34・35は浅鉢である。34はくの字形口縁を持つものである。35は波状口縁を持ち、内面に凹線が口縁端部付近にめぐる。

36は内外面ともミガキが施されている器種不明土器の口縁部である。37は底部付近の肩部片で、底部との境に明瞭なくびれがみられる。38は肩部片で、連続押圧刻み目を施し、内外面とも条痕がめぐる。39は肩部片で、頸部から傾きが変り肩部が張り出す。

40は底部が丸底で、その周囲を高台状の底部がめぐる。41は底部付近で、底部からの立ち上がりがほぼ垂直で、上げ底気味である。

42は縄文後期の深鉢口縁端部で上器片の内外面とともにナデがみられる。

#### ②石器(第24~32図-43~88)

石器はアカホヤ火山灰上面の遺物、表面採集遺物を掲載している。A1グリッドからB1グリッドにかけて礁が集中している箇所があり、そこに石匙、石錐、片面櫛器、剥片等が出土している。ほかに、石鎌やスクレイバー、二次加工剥片、磨石、石皿等が出土している。

43はチャート製石鎌で、背面が研磨されており、脚部が欠損している。44は黒曜石製の石匙で、両端が欠損している。45は打ち欠き石錐である。46はスクレイバーで、刃部は左側である。47は二次加工剥片で、左側に加工痕がみられる。

48は姫島産黒曜石製の剥片である。49はチャート製剥片である。全般的に剥片は礫面への上方からの打撃でスライスするように剥離されているものが多くみられる。78の上面は主要剥離面の打面となっている。これは、上面を横からの剥離で打面形成を行った結果である。

83・84・86は石核である。83は主に上方からの剥離を受けたあの残核であり、84の片面は上方からの剥離で、片面は礫の中心に向かって剥離を行ったあの残核である。86は片面のみ礫の中心に向かって剥離を行ったあの残核である。

85は片面櫛器であり、右側からの剥離により刃部を作出している。87は磨石、88は石皿である。どちらもA7グリッドのⅢ層から出土している。石皿は擦痕が両面にみられる。

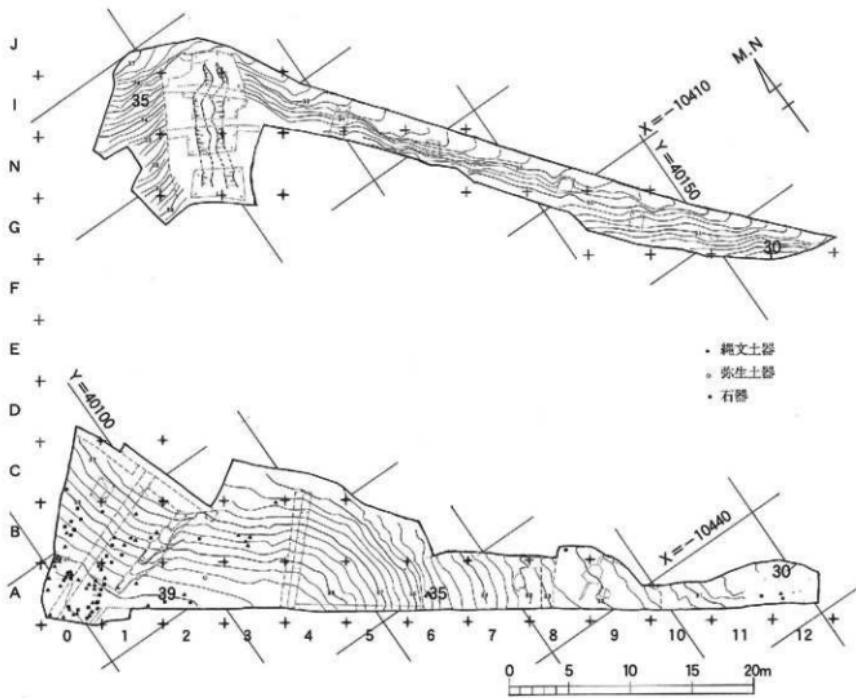
#### (3) 縄文時代後期以降の遺物(第33図-89~92)

89は弥生土器の壺の口縁部であり、口唇部の形状より夜凹式と考えられる。

90、91は須恵器の底部であり、高台付塊である。時期は形状から8C前半に比定できる。

93は洪武通宝である。表土下からの出土である。背に銘はない。腐食が激しく、虫食い状態である。

92は薩摩焼の土瓶である。この遺物のみB区表土下の遺物である。時期は18C後半に比定できる。



第19図 アカホヤ降灰以降の遺物分布図 ( $S = 1/400$ )

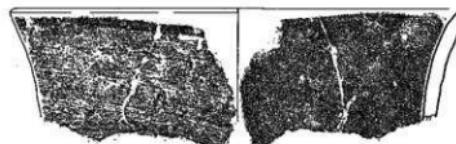
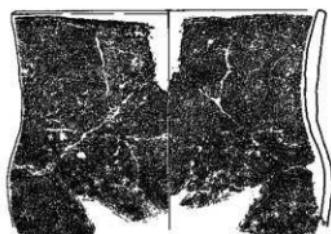


作業風景 (A区)



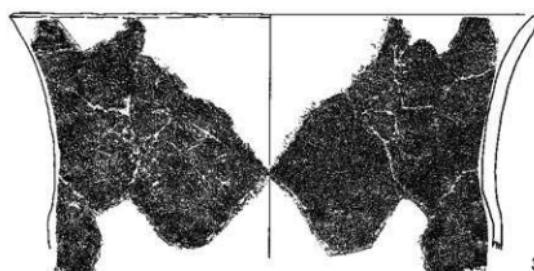
第20図 縄文時代前期土器実測図 ( $S = 1/3$ )

0 10cm



30

31



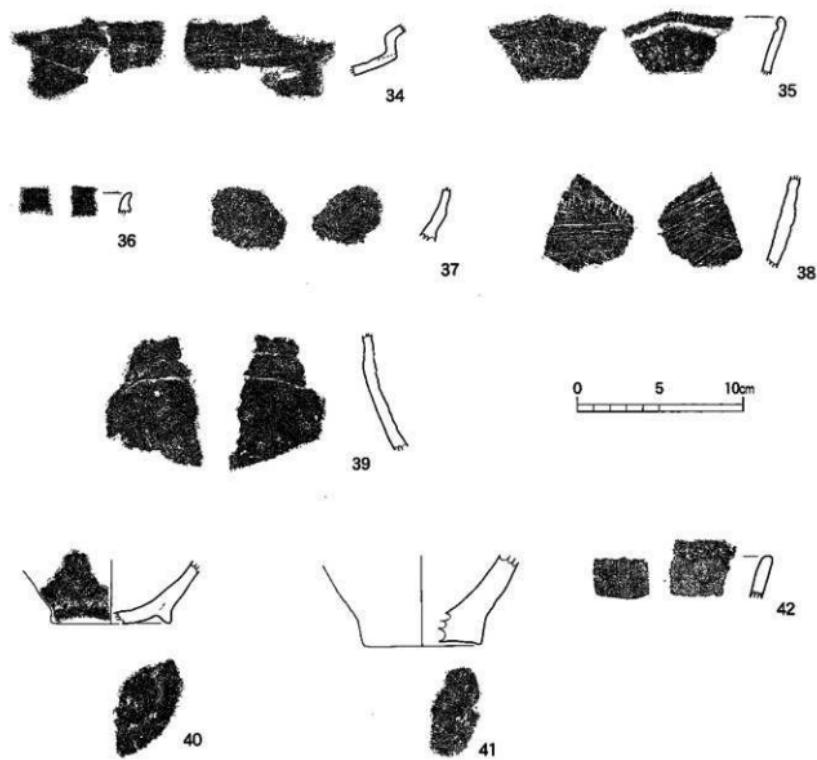
32



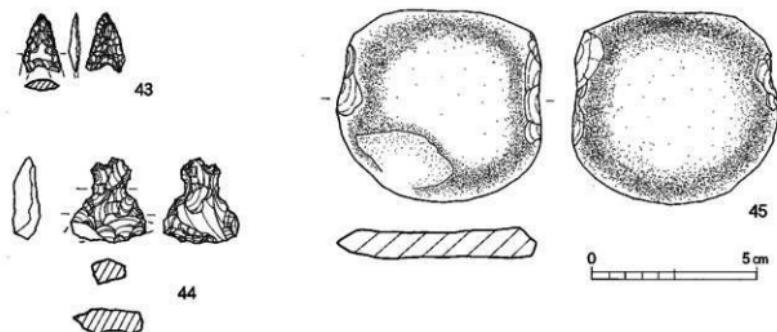
33

第21図 縄文時代後期土器実測図(1) ( $S = 1/3$ )

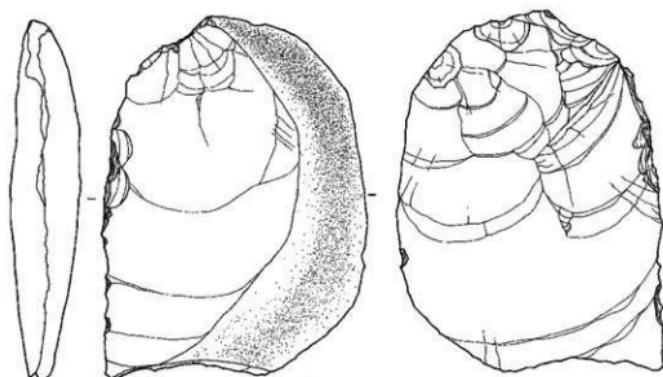
0 5 10cm



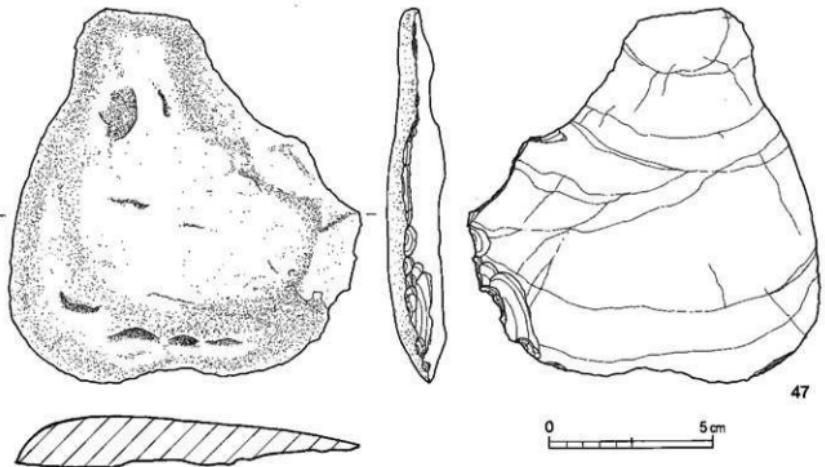
第22図 縄文時代後期土器実測図(2) ( $S = 1/3$ )



第23図 アカホヤ降灰以降石器実測図(1) ( $S = 2/3$ )



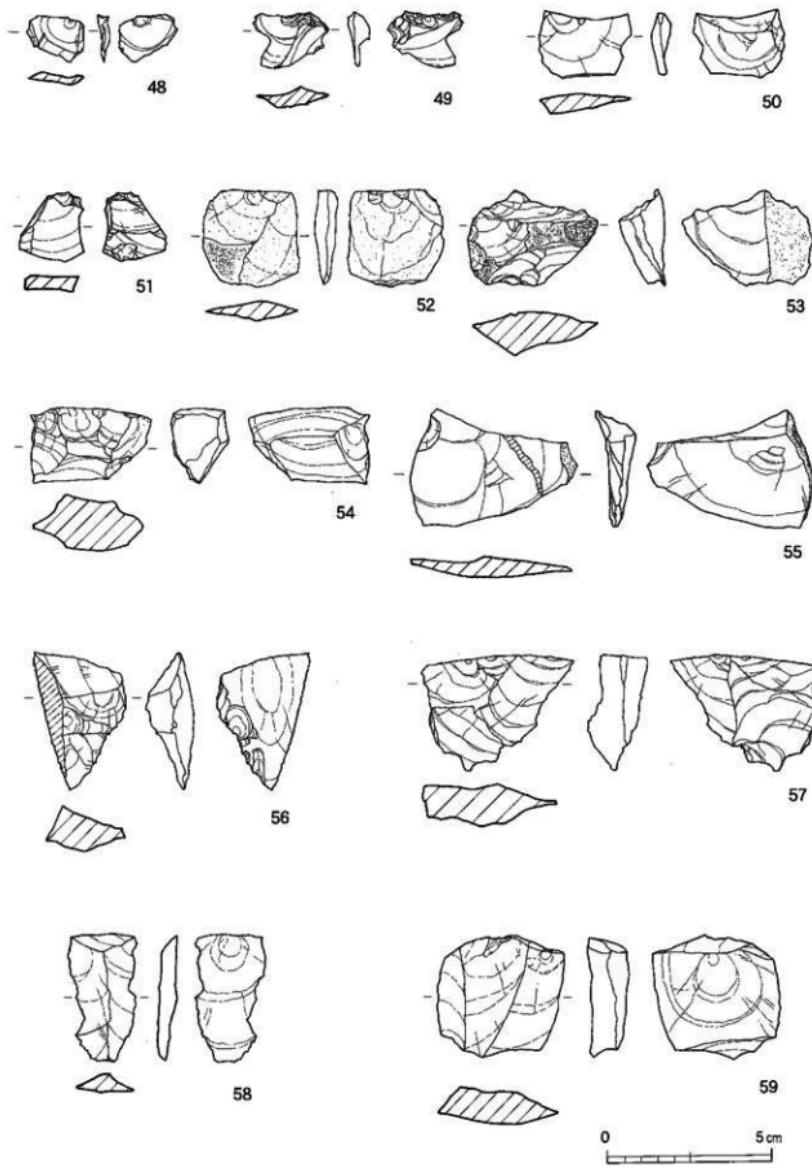
46



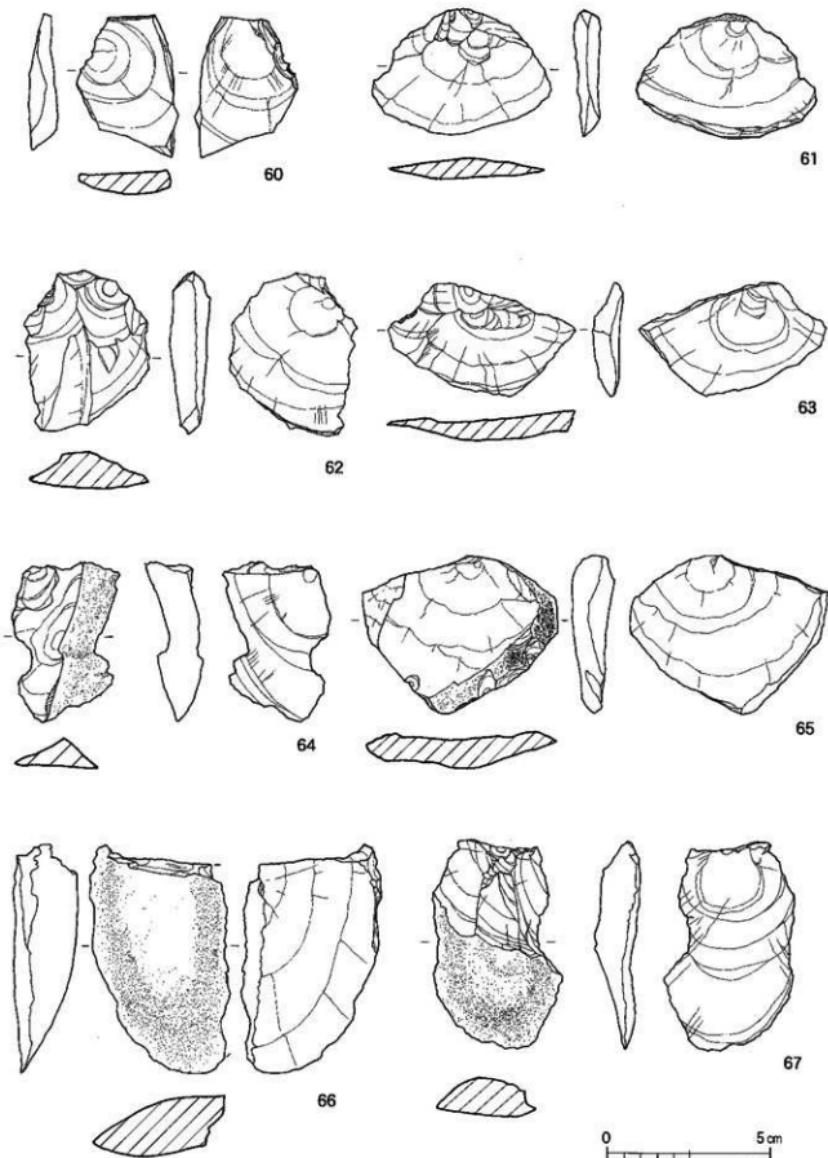
47



第24図 アカホヤ降灰以降石器実測図(2) (S = 2 / 3)

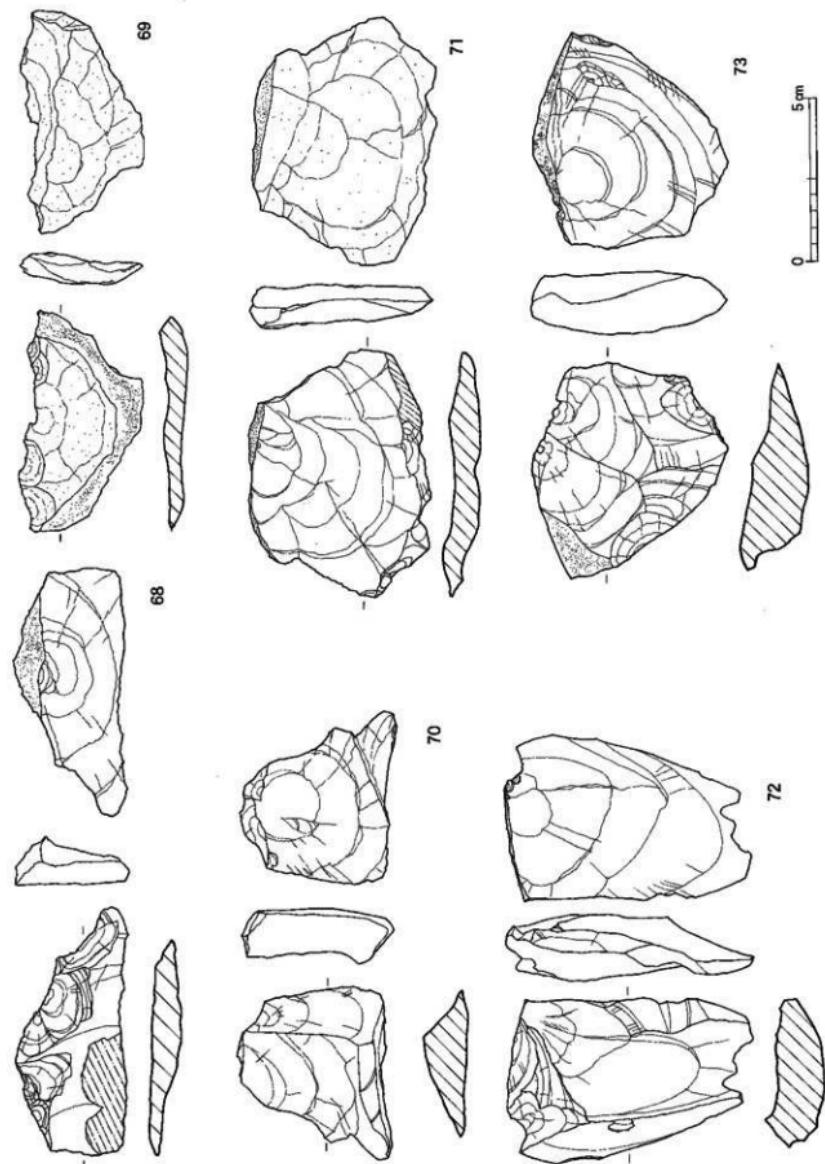


第25図 アカホヤ降灰以降石器実測図(3) (S = 2 / 3)

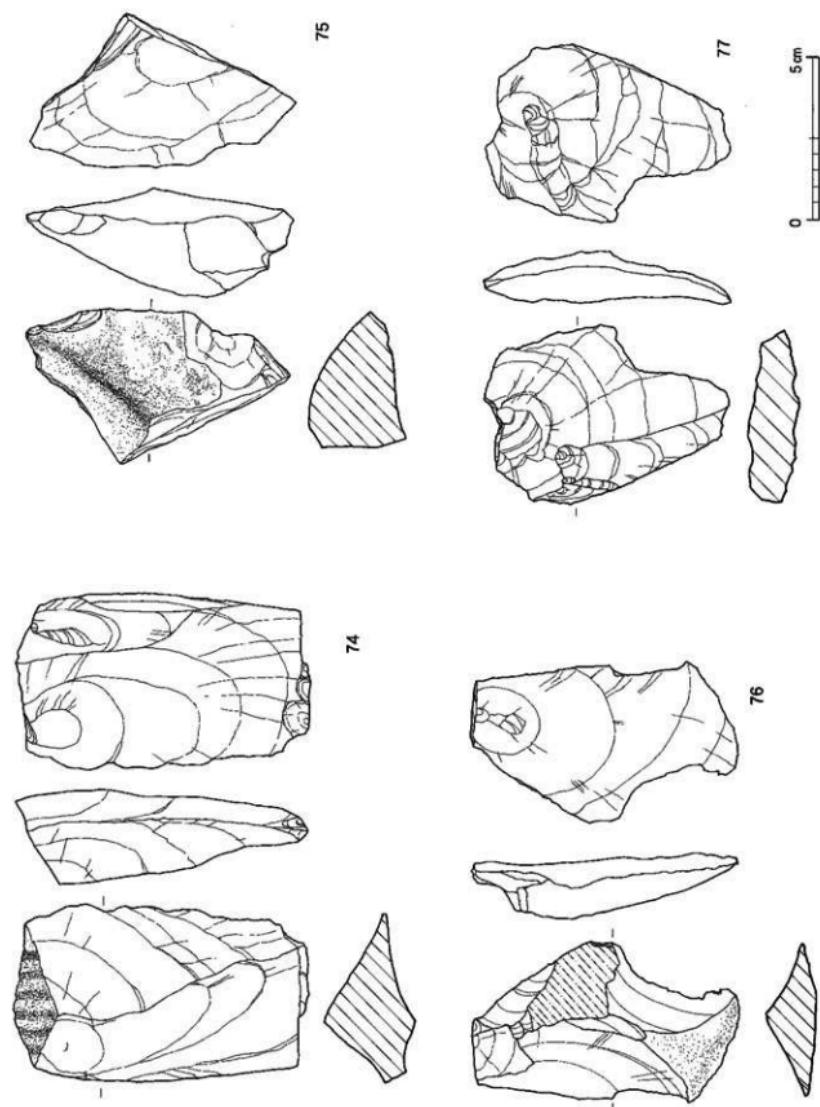


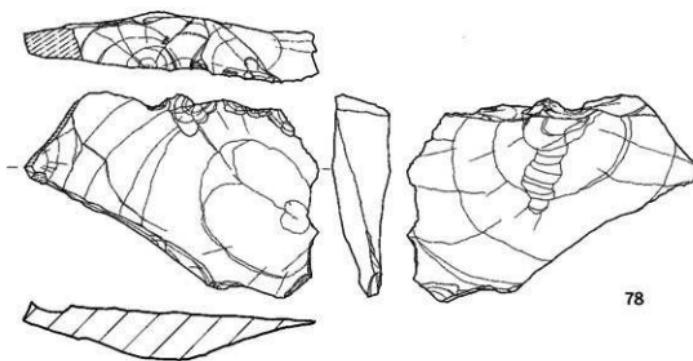
第26図 アカホヤ降灰以降石器実測図(4) (S = 2 / 3)

第27図 アカホヤ隣灰以降石器実測図(5) (S = 2 / 3)

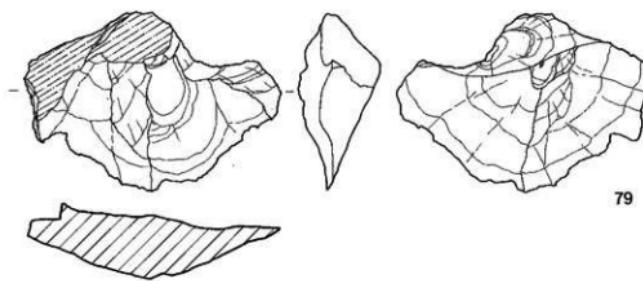


第28図 アカホヤ降灰以降石器実測図(6) ( $S = 2/3$ )

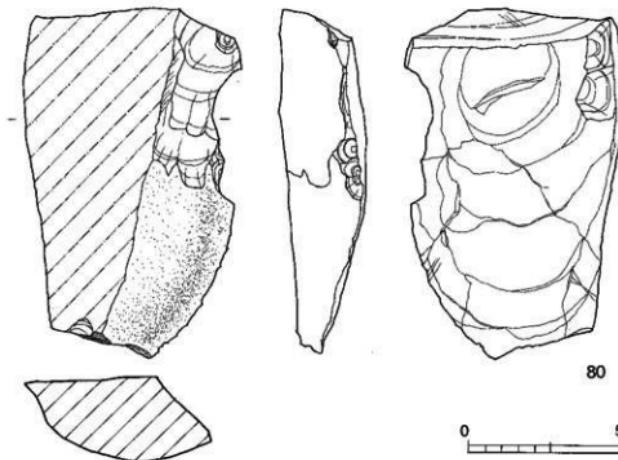




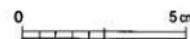
78



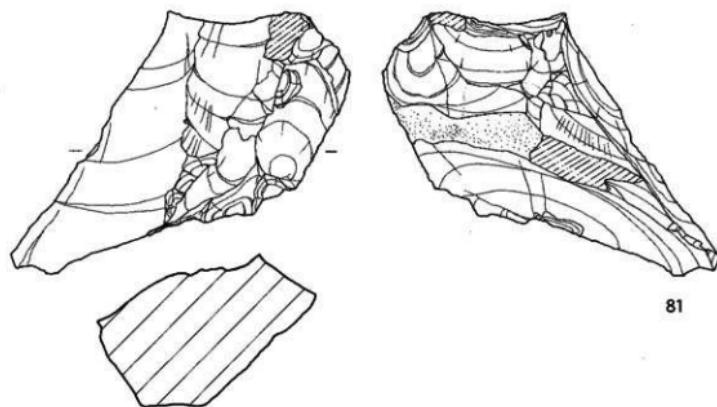
79



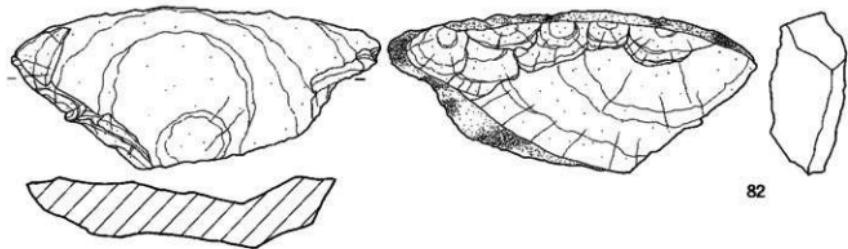
80



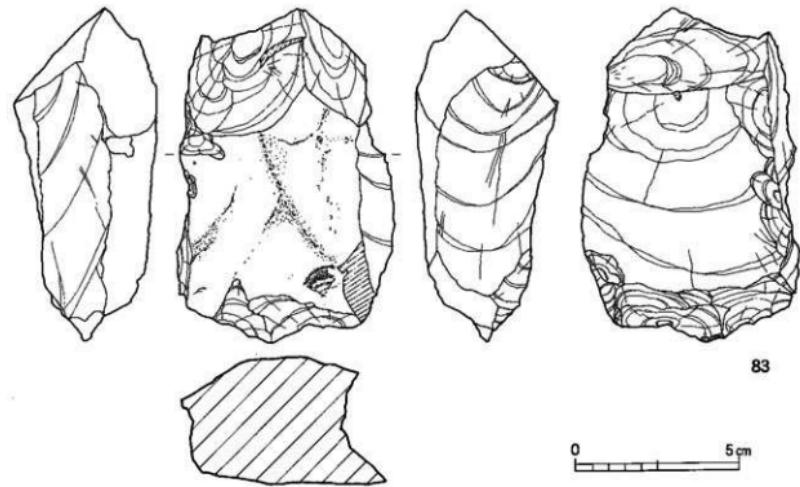
第29図 アカホヤ隣所以隣石器実測図(7) (S = 2/3)



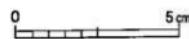
81



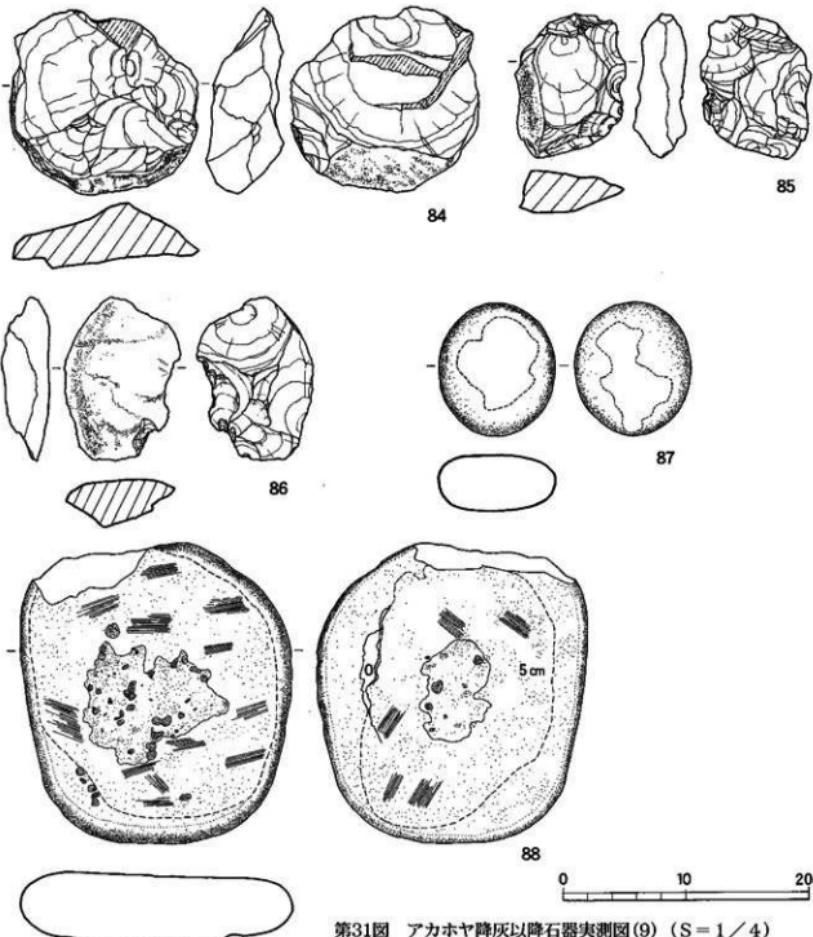
82



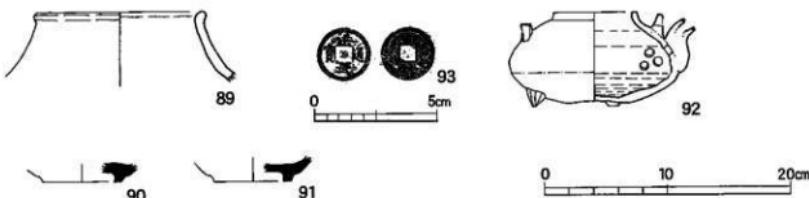
83



第30図 アカホヤ隣灰以降石器実測図(8) (S ~ 2 / 3)



第31図 アカホヤ降灰以降石器実測図(9) (S = 1 / 4)



第32図 繩文時代後期以降の遺物実測図 89～92 (S = 1 / 4) 93 (S = 1 / 2)

第2表 遺物観察表

## (1) 土器

遺物 番号	種別	部 位	出土 位置	出土 グリッド	法 量 (cm)			手法・測量・文様はか			色 調			地 上	焼成	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 純文土器	深鉢 口縁部	A区 V層	B1	-	-	-	-	横円錐型文	横ナデ	にぶい赤褐 (SYR 5/4)	にぶい赤褐 (SYR 4/3)	4mm大で黄褐色の粒、2.5mm大で 黒褐色の粒、銀細で光沢のある 磁物を含む。	良好			
2 純文土器	深鉢 口縁部	A区 V層	B9	-	-	-	-	筋方向の横円錐 型文、丁字型ナ デ、スス付	斜め方向の判斷 文	にぶい赤褐 (10YR 5/3)	にぶい赤褐 (10YR 6/4)	2mm以下で黄褐色の粒、2mm以下 で黒褐色光沢で青白い粒を含む。	良好			
3 純文土器	深鉢 口縁部	A区 S13	A10	-	-	-	-	筋方向の横円錐 型文	横ナデ	にぶい赤 (7.5YR 7/4)	にぶい赤 (7.5YR 7/4)	3~4mmの大いに赤褐色の粒、2mm大 で赤褐色光沢で青白い粒を含む。	良好			
4 純文土器	深鉢 底付付近	A区 S13	-	-	-	-	-	風化処理のため 調査不別	斜め方向のナデ	明赤褐 (SYR 5/6)	にぶい赤 (7.5YR 5/6)	5mmの無鉛の粒、3mm以下の 黒褐色の粒、6mm以下の 赤褐色の粒、6mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好			
28 純文土器	鉢 底部	A区 IV層	A0	-	-	-	-	ミニズばれ状突 起、ナデ	横・方向の赤褐文	にぶい赤褐 (SYR 4/4)	にぶい赤褐 (SYR 4/4)	1mm以下の黒褐色で光沢のある 黒褐色の粒、1mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好	轟B式		
29 純文土器	鉢 底部	A区 II層	-	-	-	-	-	ミニズばれ状突 起、ナデ	横・斜め方向の 赤褐文	にぶい赤褐 (SYR 4/4)	にぶい赤褐 (SYR 4/3)	2mm以下の黒褐色で光沢のある 黒褐色の粒、1mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好	轟D式		
30 純文土器	四脚 口縁～脚部	A区 III層	A9	18.5	-	-	-	横ナデ、スス付	横ナデ 断面的に黒斑	赤褐 (SYR 4/6)	明赤褐 (SYR 5/6)	2mm以下の乳白色の粒、3mm以下 で黒褐色の粒を含む。	良好	残存率 1/6		
31 純文土器	深鉢 I脚～脚部	A区 II層	B9	32.6	-	-	-	斜め方向ナデ、 口縁部銀ナデ、 スス付	横ナデ	にぶい赤 (7.5YR 6/4)	にぶい赤 (7.5YR 5/4)	5mm以下の黒褐色不整形な粒、4mm 以下の黒褐色の粒、6mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好			
32 純文土器	深鉢 I脚～脚部	A区 II層	B3	27.6	-	-	-	横ナデ、スス付	ナデ	赤褐 (SYR 4/6)	赤褐 (SYR 4/6)	3mm以下の黒褐色の粒、2mm以下の 黒褐色の粒、1mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好			
33 純文土器	鉢 口縁～脚部	A区 II層	-	-	-	-	-	丁寧なナーベル カギ工具痕	ナデ	にぶい赤褐 (2.5YR 4/4)	にぶい赤褐 (2.5YR 4/4)	4mm以下の黒褐色の粒、2mm以下 で黒褐色の粒、1mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好			
34 純文土器	深鉢 底部～脚部	A区 II層	-	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ	にぶい赤褐 (10YR 6/4)	にぶい赤褐 (10YR 7/4)	微細な光沢のある磁物粒を含む。	良好	複合面が みられる		
35 純文土器	浅鉢 I脚部	A区 II層	-	-	-	-	-	ナデ、スス付	風化処理のナデ、 底付	にぶい赤 (7.5YR 5/6)	にぶい赤 (7.5YR 5/6)	3mm以下の乳褐色の粒、2mm以下の 乳褐色の粒を含む。	良好			
26 純文土器	深鉢 口縁部	A区 II層	A0	-	-	-	-	横方向のナデ、 スス付	横方向のナデ、 スス付	にぶい赤褐 (10YR 6/4)	にぶい赤 (10YR 6/4)	微細な光沢のある磁物粒、3mm以 下の黒褐色の粒を含む。	良好			
37 純文土器	不明 底付付近	A区 II層	B1	-	-	-	-	斜め方向のナデ	斜め方向のナデ	赤褐 (10YR 5/1)	にぶい赤 (7.5YR 6/4)	3mm以下の乳褐色の粒、2mm以下 で黒褐色の粒を含む。	良好			
38 純文土器	深鉢 IV層	A区 II層	A6	-	-	-	-	高級印押到付し、 底付方向の赤褐文	斜め方向の赤褐文	明赤褐 (10YR 6/4)	灰赤褐 (10YR 5/2)	微細な黒褐色の粒、1mm以下の 黒褐色の粒を含む。	良好			
39 純文土器	深鉢 底部	A区 II+Ⅲ層	-	-	-	-	-	横ナデ、斜め方向 のナデ、スス付	横ナデ	にぶい赤 (7.5YR 5/4)	にぶい赤褐 (SYR 4/4)	3mm以下の乳褐色の粒を含む。	良好			
40 純文土器	深鉢 底部	A区 II層	-	-	7.4	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐 (10YR 7/4)	にぶい赤褐 (10YR 7/4)	3mm以下の黒褐色、赤褐色、黒褐 色の粒を含む。	良好	残存率 1/4		
41 純文土器	深鉢 底部	A区 II層	-	-	7.2	-	-	横ナデ、斜め方向 のナデ、上部付	ナデ	にぶい赤 (7.5YR 6/4)	横褐 (10YR 4/1)	10mm以下の赤褐色の粒、2mm以下 で黒褐色の粒を含む。	良好	残存率 1/4		
42 純文土器	深鉢 口縁部	A区 II層	A9	-	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	赤褐 (7.5YR 4/6)	にぶい赤褐 (7.5YR 4/4)	3mm以下の乳褐色の粒、2mm以下 で黒褐色の粒を含む。	良好			
89 純文土器	壺 I脚～脚部	A区 II層	A2	12.5	-	-	-	丁寧なナデ、横方 向の赤褐文	ナデ	褐 (7.5YR 6/6)	褐 (7.5YR 6/6)	微細な光沢のある磁物粒、3mm以 下の黒褐色の粒を含む。	良好	轟D式		

## (2) 須恵器

遺物 番号	種別	部 位	出土 位置	出土 グリッド	法 量 (cm)			手法・測量・文様はか			色 調			地 上	焼成	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面			
90 頸甕器	高台付壇 底部～脚部	A区 II層	-	-	6.4	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰褐 (2.5YR 7/2)	灰褐 (2.5YR 7/2)	1mm以下の白色磁物粒を含む。	堅微			
91 頸甕器	両台付壇 底部～脚部	A区 II層	-	-	6.4	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰褐 (2.5YR 4/1)	灰褐 (2.5YR 6/1)	1mm以下の褐色磁物粒を含む。	堅微			

## (3) 陶磁器

遺物 番号	種別	部 位	出土 位置	出土 グリッド	法 量 (cm)			手法・測量・文様はか			色 調			地 上	焼成	備考
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面			
92 陶磁器	土瓶 定形	B区	-	-	7.8	-	7.7	施釉	施釉、スス付	灰 (10YR 4/1)	灰 (10YR 4/1)	1.5mm以下の灰白・褐色の粒を含む。	良好	難窯性		

第3表 石器計測表

番号	器種	石材	出土位置	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
5	剥片	頁岩	V A9	3.1	1.95	0.5	2.4	10-11と複合
6	剥片	頁岩	V A9	6.55	5.15	2.7	54.3	10-12と複合
7	石核	頁岩	V A9	5.7	8.25	4.1	221.0	11-12と複合
8	石核	チャート	V C1	2.6	2.9	0.4	2.1	鏡形石核
9	石核	黒曜石	V A8	1.9	1.35	0.3	0.5	
10	剥片	黒曜石	SC1	1.85	1.7	0.8	2.2	SC1底部出土
11	二次加工	ホルンフェルス	V A9	5.6	3.05	1.1	13.0	
12	剥片	黒曜石	V A8	2.5	1.75	0.6	1.7	
13	剥片	頁岩	V A9	3.3	1.18	0.8	2.5	
14	剥片	ホルンフェルス	V A9	3.65	2.55	0.5	5.9	
15	剥片	ホルンフェルス	V A1	2.25	3.3	0.7	3.4	
16	剥片	ホルンフェルス	V A9	2.55	5.4	1.55	19.6	
17	剥片	頁岩	V A9	4.85	4.3	1.1	14.8	
18	剥片	頁岩	V A8	5.45	3.8	1.1	18.3	
19	剥片	ホルンフェルス	V A9	6.2	5.4	1.6	42.2	黒化著しい
20	剥片	頁岩	V A8	3.95	6.0	1.15	26.5	被覆による ハジケ
21	剥片	ホルンフェルス	V A9	5.2	4.75	1.15	14.2	打開調整
22	剥片	ホルンフェルス	S13	4.1	5.4	1.2	20.8	S13出土
23	剥片	ホルンフェルス	V A9	3.55	6.6	1.7	27.8	
24	剥片	ホルンフェルス	V A9	10.2	4.2	3.2	190.4	
25	剥片	ホルンフェルス	S13	5.6	10.1	1.6	69.2	S13出土
26	剥片	頁岩	V A9	7.7	6.15	1.6	67.2	
27	轟石・円石	砂岩	V C1	10.3	5.7	4.0	288.0	
43	石核	チャート	V B1	1.8	1.1	0.3	0.5	同鉢欠損 背面研磨
44	石核	黒曜石	V A9	2.6	2.3	0.8	3.9	
45	石核	頁岩	V A9	5.85	6.2	0.95	56.0	
46	スクレーパー	ホルンフェルス	V E8	11.15	8.1	2.2	197.0	
47	二次加工	ホルンフェルス	V B9	11.5	10.8	1.8	236.7	
48	剥片	黒曜石	V B1	1.4	1.8	0.4	0.8	鷲角底
49	剥片	チャート	V A2	1.7	2.35	0.7	1.4	
50	剥片	ホルンフェルス	V C9	2.2	2.8	0.6	3.0	
51	剥片	流紋岩	-	2.15	2.0	0.5	2.3	
52	剥片	砂岩	-	2.95	3.0	0.7	5.3	
53	剥片	ホルンフェルス	V F9	2.95	4.0	1.4	12.1	
54	剥片	ホルンフェルス	V B1	2.35	3.8	1.82	18.0	
55	剥片	ホルンフェルス	V B1	3.7	5.05	1.2	13.5	
56	剥片	ホルンフェルス	V A9	4.2	2.8	1.4	11.6	
57	剥片	ホルンフェルス	V II	3.55	4.7	1.8	17.5	
58	剥片	ホルンフェルス	V B1	3.95	2.1	0.5	4.3	
59	剥片	ホルンフェルス	V F	3.9	3.9	1.2	20.4	
60	剥片	ホルンフェルス	V F	4.2	3.1	0.85	11.3	
61	剥片	ホルンフェルス	V II	3.9	5.5	0.8	15.6	

遺物番号	器種	石材	出土位置	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
62	剥片	ホルンフェルス	V A2	4.95	3.8	1.1	21.0	
63	剥片	ホルンフェルス	V A9	3.5	5.8	0.8	13.1	
64	剥片	ホルンフェルス	V	4.85	3.4	1.75	15.7	
65	剥片	ホルンフェルス	V	4.9	5.9	1.3	32.5	
66	剥片	ホルンフェルス	A12	7.0	4.3	2.0	60.8	
67	剥片	ホルンフェルス	V A9	6.4	4.0	1.4	27.0	
68	剥片	ホルンフェルス	V B9	3.5	7.6	1.5	25.8	
69	剥片	ホルンフェルス	V	3.75	6.8	0.95	16.3	
70	剥片	ホルンフェルス	V A9	4.65	5.35	1.7	32.0	
71	剥片	ホルンフェルス	V A9	5.6	7.6	1.3	53.0	
72	剥片	ホルンフェルス	V A11	7.6	5.1	2.1	72.2	
73	剥片	頁岩	V A9	6.0	6.6	2.05	76.8	
74	剥片	ホルンフェルス	-	9.1	5.5	2.9	116.5	
75	剥片	ホルンフェルス	V	8.1	4.75	3.3	96.0	
76	剥片	ホルンフェルス	V	8.2	4.8	1.6	51.2	
77	剥片	尾鉤巖性岩	V A9	7.5	5.4	1.6	57.5	
78	剥片	ホルンフェルス	-	6.3	9.0	1.75	81.4	打開調整
79	剥片	ホルンフェルス	V A1	5.5	7.8	2.55	58.5	
80	剥片	ホルンフェルス	V B9	10.85	6.75	2.6	214.3	
81	剥片	ホルンフェルス	V B9	8.0	10.35	4.6	238.9	
82	剥片	ホルンフェルス	V B9	11.4	5.0	2.5	104.6	
83	剥片	ホルンフェルス	V	10.25	6.7	4.3	305.7	
84	石核	ホルンフェルス	V B1	15.1	15.4	6.4	1625.0	
85	石核	ホルンフェルス	V A9	11.75	9.0	4.3	474.5	
86	穀器	ホルンフェルス	V B9	13.45	9.6	4.0	456.0	
87	磨石	砂岩	V A7	11.0	9.6	4.7	719.8	
88	石皿	砂岩	V A7	24.8	22.3	6.0	5400.0	

# 第V章 自然科学分析

## 第1節 目的

藤山第2遺跡は開拓谷の斜面に立地することから層序が把握しやすく、B区の確認調査で検出した溝状の掘込みの性格も掘み切れていないことから、テフラ分析で層序等を確認し、集石遺構周辺の古環境復元のため植物珪酸体分析及び花粉分析を実施した。これら自然科学分析は株式会社古環境研究所に業務委託した。

## 第2節 テフラ分析

### (1) 調査地点

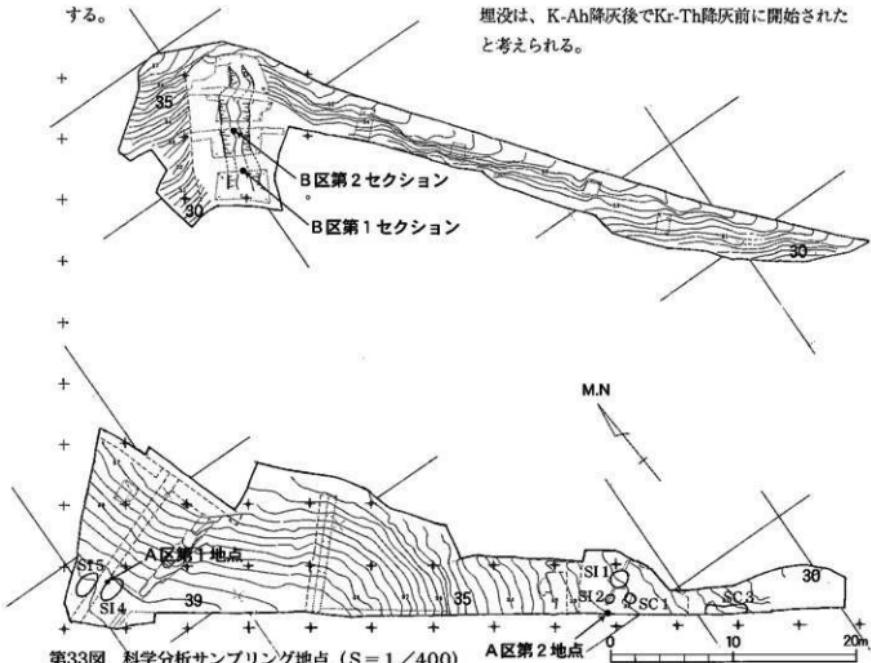
調査の対象となった地点は、A区第1地点・A区第2地点・B区第1セクション・B区第2セクションの4地点である(第34図)。

### (2) 分析結果

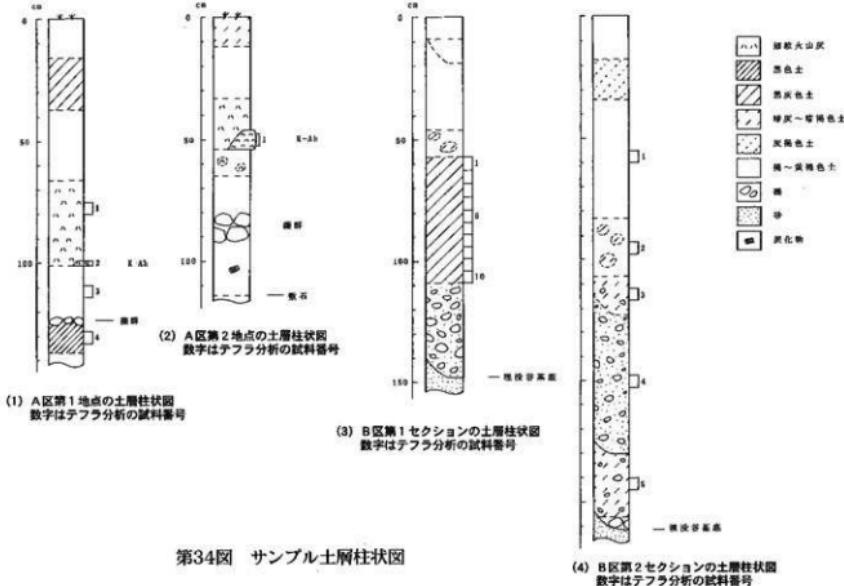
A区第1地点の試料4に含まれる火山ガラスについては、その屈折率から約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT)に由来する。

A区第1地点の試料3に含まれる火山ガラスについては、約6,300年前に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)に由来する。その上位の試料2のテフラ層が、層相さらに火山ガラスの色調や形態などからK-Ahに同定されることがから、何らかの攪乱作用により上方から混入したものと思われる。なお、第2地点で認められる橙色細粒火山灰層についても、層相からK-Ahに同定される。

B区第1セクションの試料6付近、また第2セクションの試料3付近に降灰層準があると推定された褐色スコリアで特徴づけられるテフラは、その岩相から10~13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア(Kr-Th)に由来すると考えられる。また無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスは、その特徴から、K-Ahに由来するもののがほとんどと思われる。以上のことから、B区で検出された溝状の掘込みの埋没は、K-Ah降灰後でKr-Th降灰前に開始されたと考えられる。



第33図 科学分析サンプリング地点 (S = 1/400)



第34図 サンプル土層柱状図

(1) A区第1地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

(2) A区第2地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

(3) B区第1セクションの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

(4) B区第2セクションの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

第4表 A区第1地点  
火山ガラス比分析結果

	BCN	bw(c1)	bw(pb)	bw(w)	ad	mt(pg)	mt(fu)	その他の合計
1	33	0	2	3	1	0	215	250
2	79	9	6	2	1	8	153	250
3	6	2	1	2	1	1	237	250
4	3	0	0	1	0	0	246	250

数字は粒子数。bw: バブル型, ad: 中間型, pe: 硅石型, cl: 透明, ph: 非晶質, bw: 白色, op: スポンジ状, fb: 雜質斑状。

第5表 A区第1地点  
重鉱物組成成分分析結果

	el	op	ops	ko	hi	st	その他の合計	
1	0	125	83	0	0	63	1	250
2	0	82	44	0	0	92	2	250
3	0	108	53	0	0	76	1	250
4	0	106	56	2	0	85	3	250

数字は粒子数。el: カンラン石, op: 斜方輝石, ops: 斜方輝石, ko: 角閃石, hi: 黑雲母, st: 錫鉄鉱。

第6表 B区テフラ検出分析結果

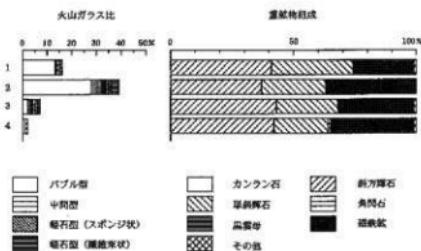
セクション	試料	黒石・スコリヤ		火成ガラス	
		量	色	量	色
3	3	++	褐	1.1	+ bw
	4	++	褐	1.0	+ bw
	5	++	褐	1.1	+ bw
	8	-	-	-	+ bw
	10	-	-	-	+ bw
					透明, 混合, 灰
4	1	+	-	1.6	+ bw
	2	-	-	1.1	+ bw
	3	++	褐	1.1	+ bw
	4	-	-	-	+ bw
	5	-	-	-	+ bw

++: とくに多い, +: 多い, -: 中程度, -: 少ない, -: 認められない。量: 重量の算定値, bw: バブル型, ad: 中間型, pe: 硅石型。

第7表 A区屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	純方輝石 (n)
第1地点	3	1.598-1.512	1.794-1.707
第1地点	4	1.499-1.621(1,500)	1.794-1.797

屈折率の測定は、屈度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）による。(1) note.



第35図 A区第1地点テフラ組成ダイヤグラム

### 第3節 植物珪酸体分析

#### (1)はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪藻 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

#### (2) 試料

分析試料は、A区第1地点とA区第2地点から採取された計4点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

#### (3) 分析結果

##### ① 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表8および第37図、第38図に示した。

##### ② 植物珪酸体の検出状況

###### 1) A区第1地点

SI4直下層（試料3）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ウクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、樹木（その他）なども検出された。K-Ahの下層（試料2）では、ネザサ節型がやや増加し、ミヤコザサ節型は減少している。K-Ah混層（試料1）では、ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、マンサク科（イスノキ属）が出現しており、イネ科はいずれも減少している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

###### 2) A区第2地点

SI1の下層（試料1）について分析を行った。その結果、ミヤコザサ節型が多量に検出され、スキ属型、ウクサ族A、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。

#### (4) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代早期とされる集石遺構の下層の堆積当時は、スキ属やチガヤ属、ネザサ節、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などが生育するイネ科植生であったと考えられ、周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。タケア科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期一間氷期サイクルの変動と一致することが知られている。ここでは、クマザサ属がやや優勢であることから、当時は比較的冷涼な気候条件であったと推定される。クマザサ属などのササ類は常緑であることから、草本類が枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている。遺跡周辺にこれらのササ類が存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

その後、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）の下層では、ネザサ節が増加し、クマザサ属はあまり見られなくなったと推定される。このような植生変化は、完新世における気候温暖化に対応していると考えられる。

K-Ah混層の堆積当時は、遺跡周辺にシイ属、アカガシ亜属（カシ類）、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、イネ科草本類はあまり見られなかったと推定される。南九州の沿岸部では、約7,500年前にはシイ属を主体とした照葉樹林が成立していたと考えられるが、本遺跡周辺では地形的な要因など何らかの原因で照葉樹林の拡大が遅れたと推定される。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されると期待される。

第8表 植物珪酸体分析結果  
検出密度(単位: ×100個/g)

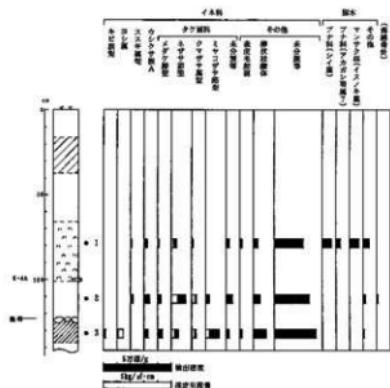
分類群	学名	地点・試料		A区第1地点	B区第2地点
		1	2	3	1
イネ科	Gramineae (Grasses)				
キビ族型	Paniceae type			14	
ヨシ属	Phragmites (reed)			7	
ススキ属型	Miscanthus type	7	13		6
ウサクサ族A	Andropogonae A type	22	38	28	52
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	7	19	28	
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	36	101	48	19
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	7	32	28	19
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa			25	207
未分類等	Others	22	44	21	6
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	14		14	
棒状珪酸体	Rod-shaped	29	44	90	91
未分類等	Others	208	253	303	298
樹木起源	Arborescent				
ブナ科(シイ属)	Castanopsis			65	
ブナ科(アカガシ亜属?)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis?			29	
マンサク科(イスノキ属)	Disylium			65	
その他	Others	43	13	7	
(海綿骨針)	Sponge			6	
植物珪酸体总数	Total	553	582	682	700

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

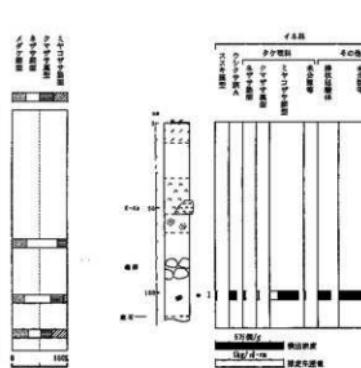
ヨシ属	Phragmites (reed)			0.43
ススキ属型	Miscanthus type	0.09	0.16	0.08
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.08	0.22	0.32
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.17	0.49	0.23
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	0.05	0.24	0.21
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.08	0.29	0.62

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	27	22	31
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	56	48	22
クマザサ属型	Sasa (except Miyakozasa)	17	23	20
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	7	28	72



第36図 A区第1地点植物珪酸体分析結果



第37図 A区第2地点植物珪酸体分析結果

## 第4節 花粉分析

### (1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

### (2) 試料

分析試料は、SI4 から採取された3点である。これらは、植物DNA分析に用いられたものと同一試料である。

### (3) 分析結果

出現した分類群は、樹木花粉1、草本花粉3、シダ植物胞子1形態の計5である。これらの学名と和名および粒数を表9に示す。

### (4) 花粉分析から推定される植生と環境

分析の結果、試料1ではコナラ属コナラ亜属、試料2ではソバ属やタンボボ亜科、試料3ではタンボボ亜科やキク亜科が検出されたが、いずれも少量である。花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、縄文時代早期の集石遺構の上下層の堆積当時は、タンボボ亜科やキク亜科などが生育する比較的乾燥した環境であったと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

第9表 花粉分析結果

学名	分類群	A区第1地点			
		和名	1	2	3
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1		
<i>Lactucoideae</i>	タンボボ亜科		8	5	
<i>Astroideae</i>	キク亜科			7	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monocolate type spore	單条溝胞子		2		
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0	0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	9	12	
Total pollen	花粉総数	1	9	12	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	2	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	

## 第VI章 まとめ

これまで遺構、遺物をアカホヤ火山灰降灰以前と以降に大きくわけて述べてきた。ここでは調査で解明したことや見通し、問題点等について述べていきたい。

### (1) 縄文時代早期

遺跡範囲が沢をはさむ急斜面のみである本遺跡において、集石遺構5基、土坑1基など縄文時代早期の遺構を検出できた。平坦地やゆるやかな斜面に展開することが多い集石遺構が斜面の落ち際で検出できたことは、集石遺構の立地範囲を考える上で意義がある。この時期は、遺構、遺物の出土状況や斜面の中腹という地形から考えると、居住地の周辺であった可能性が高いといえる。草食動物の重要な食物であるクマザサ属が優勢であったとする分析結果から周辺に狩りの獲物の存在が予想される。

### (2) 縄文時代後期

縄文時代後期にはA区北側の緩斜面を中心にある程度、土器や石器が出土しているが、斜面での出土ということから考えると、廃棄や流れ込みである可能性が強い。削平された丘陵部が調査区よりも標高が高く、はるかに広い土地であることから、土器や石器の出所の多くはそこに求められよう。

### (3) その他の時代

旧石器時代についてはトレント調査で終わらせているが、後期旧石器時代の技法の可能性のある接合資料や剥片がみられたのみであり、その存在を明確にできなかった。弥生時代では夜白式土器（図33-89）の出土は県内での類例は少ない。薩摩焼の土器は流通範囲を考える上で意味のある出土といえる。

### (4) 遺跡の概要

藤山第2遺跡は、削平された北側と南側の丘陵部分に本来の遺跡の中心が展開していたと考えられる。人の痕跡は、旧石器時代は可能性が窺える程度で、縄文時代早期は居住地周辺として機能していたと考えられる。縄文時代後期は削平された丘陵部を主体とした生活が営まれたと考えられる。わずかな遺物しか出土しなかった縄文時代前期、弥生時代前期、古代、中世、近世については、人の往来や物の流通

は推し量れるものの、今後、周辺地での調査例の増加を待ちたい。

### (5) 課題及び問題点

今回の調査では集石遺構内や集石遺構間での疊接合作業を行わなかったことで、SI1とSI2の関係を明確にできなかった。しかし、SI1とSI2は隣接し、SI2の構成する構の数が少なく、密集していないという出土状況から、SI2はSI1の構成構の一部で廃棄場であるとの推測もできる。また、B区で確認した沢については、調査当初は溝状遺構として調査していたが、堆積状況や科学分析の結果などから最終的に斜面に流れ込む沢と判断した。

石器は全般的に製品が少なく、剥離技術も単純で石材も在地系であるが、遺跡の全容を示すため全点を掲載した。土器では縄文時代早期土器1点（図13-4）が特徴的であった。他の早期土器の胎土と比べて角閃石を多く含み、土色が明るい赤色であることから阿蘇IV火山灰を用いた可能性も指摘でき、胎土に黒曜石が1粒混入していることから、胎土による土器研究の一例を示すことができたと考える。

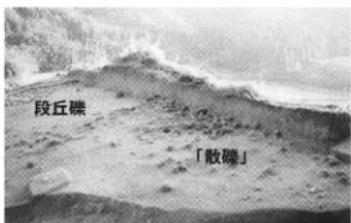
### 参考文献

- 「宮崎県史 資料編 考古1」1989 宮崎県
- 「新富町史 通史編」1992 新富町
- 「東九州自動車道沿線遺跡詳細分布調査報告書2（西都～延岡・延岡道路）」1995 宮崎県
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第49集「平成12年度 東九州自動車道（都農～西都門）関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書I」2001 宮崎県埋蔵文化財センター
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集「北牛牧第5遺跡・銀座第3A遺跡 東九州自動車道（都農～西都門）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2」2003 宮崎県埋蔵文化財センター





A区調査前（東から）



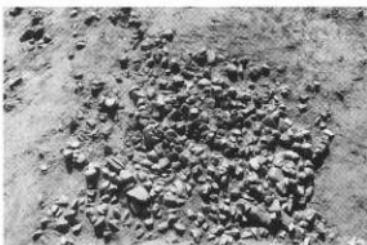
A区段丘疊、「散疊」検出状況（北から）



SI 1 検出状況



SI 3 検出状況



SI 4 検出状況



SI 4 配石

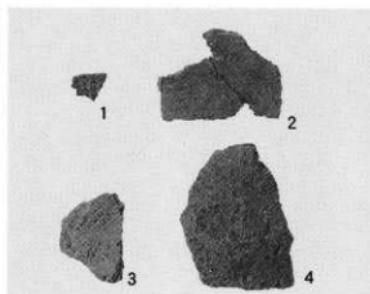


SI 5 検出状況

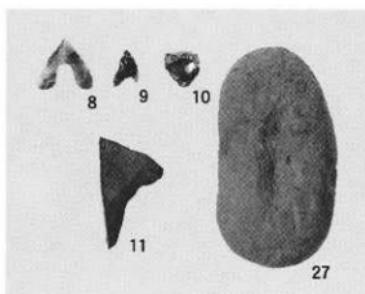


SC 1 完掘状況

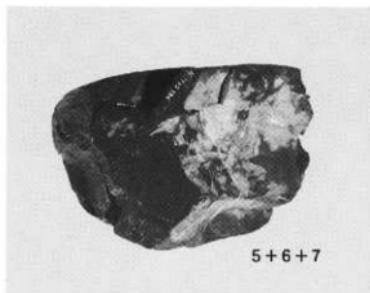
圖版 2



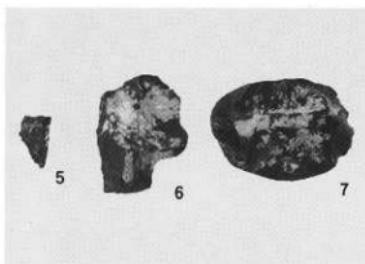
繩文時代早期土器



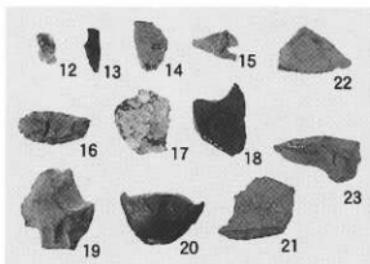
繩文時代早期石器 1



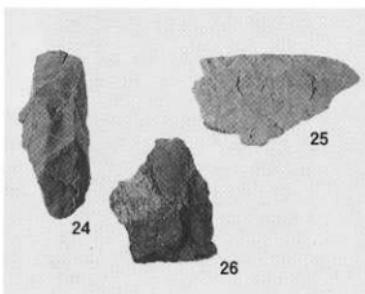
繩文時代早期 接合資料 1



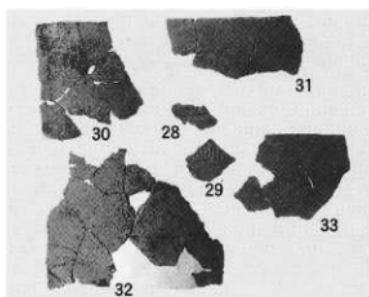
繩文時代早期 接合資料 2



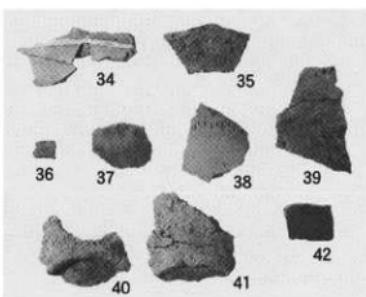
繩文時代早期石器 2



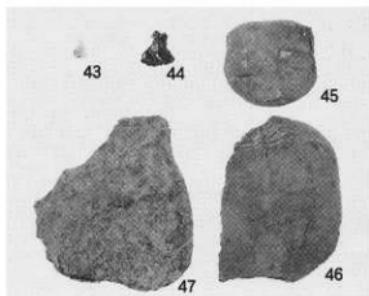
繩文時代早期石器 3



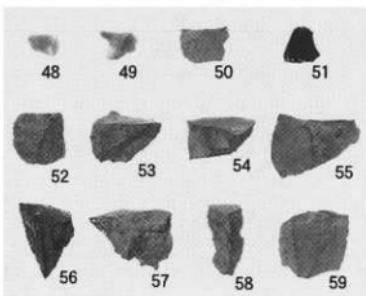
縄文時代前期土器・後期土器 1



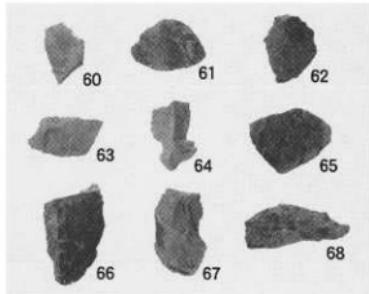
縄文時代後期土器 2



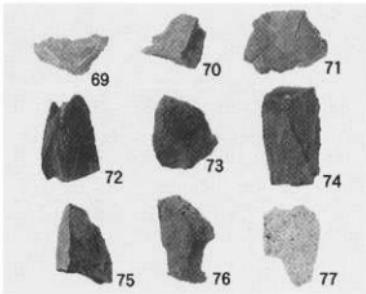
アカホヤ降灰以降石器 1



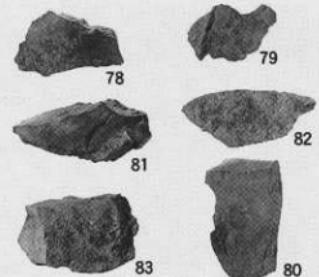
アカホヤ降灰以降石器 2



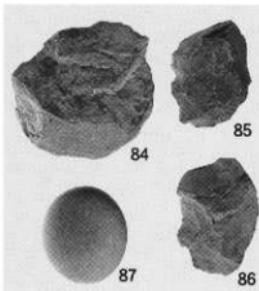
アカホヤ降灰以降石器 3



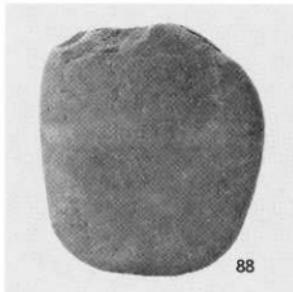
アカホヤ降灰以降石器 4



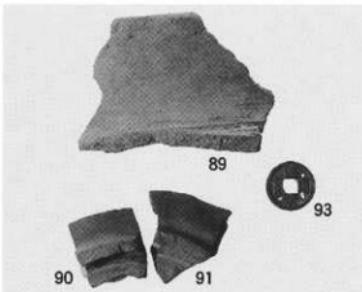
アカホヤ降灰以降石器 5



アカホヤ降灰以降石器 6



台 石



縄文時代後期以降の遺物 1



縄文時代後期以降の遺物 2

## 報告書抄録

ふりがな	ふじやまだい2いせき						
書名	藤山第2遺跡						
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	7						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第95集						
執筆・編集担当者名	戸 玄 浩 志						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下郡珂4019番地 TEL 0985-36-1171						
発行年月日	2004年12月3日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふじやまだい2いせき 藤山第2遺跡	みやざきけん 宮崎県 こゆくんしんとみちょう 児湯郡新富町 おおだにゅうた 大字新田 あざいしだ 字石田	45402	32°5'5"	131°25'30"	2000年9月4日 ～ 2001年1月9日	1,000m <sup>2</sup>	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
藤山第2遺跡	散布地	縄文時代 (早期、後期)	集石遺構 土坑	5基 1基	石鏡・敲石・石錘 石甕・スクレイパー 繩文土器（田村式） 弥生土器（夜臼式）		

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第95集

## 藤山第2遺跡

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 7

2004年12月

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下郡河4019番地  
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印 刷 田中印刷有限会社  
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地  
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285

---